杏アフター

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

杏アフター

【Ｎコード】

Ｎ７８３３Ｍ

【作者名】

ゲキガンガー

【あらすじ】

杏ルートのアフターストーリーです。

杏アフター（前書き）

一部杏ルートと、智代アフターのネタバレあります。

杏アフター

『杏アフター』　作ゲキガンガー。

「朋也、好きだからね」
杏は満面の笑みを浮かべていた。

「朋也、ご飯にする？　お風呂にする？　それともあたし？」
俺の帰宅を待っていた杏は、開口一番そう言った。
さて、どうするか。
『1、杏、2、杏、3、杏』
って、これじゃ選択肢が杏しかないじゃないか！
俺は胸中で叫ぶ。
「勿論ご飯よね～。朋也、仕事帰りでお腹減ってるでしょ。待って
て。あたしが腕によりをかけておいしい夕飯を作ってあげるから。
なに？　もしかして期待してた？」
「……いえ、なんでもありません」
なんだろうか。この喪失感は。

俺の前には、杏の作った手料理が並べられている。色合いも良い、
家庭的な食事だ。
「――相変わらず見た目によらず――」
ギロリ、とにらまれた。そして、明らかな殺気を感じる。恐怖に震
えた俺は、
「いや、見かけどおりに杏は料理が上手いなー。こんな彼女がいて
俺は世界一の幸せものだ」
「ふふっ。朋也は正直ね。本当のことを言っても何もでないわよ」
杏は笑顔を浮かべる。
とりあえず、杏の機嫌は損ねずに済んだ。春原ほどではないが、扱

いやすい。
杏と付き合いはじめてから、もう一年が経とうとしている。親父との仲が悪かった俺は、高校を卒業してから、すぐに就職し、一人暮らしをはじめた。
また、杏は保母さんになる為に短大に通うことになった。そして、時間があれば、夕飯はこうして作りにきてくれる、出来た彼女だった。

……さて。
食欲は満たされた。男というのは、食欲が満たされると、性欲が沸いてくるものらしい。
杏は料理の後片付けで忙しそうだった。部屋の中は、テレビの音、恐らくはお笑い番組の音が流れているだけだ。それにしたって、見ているわけではない。付いているだけだった。
……暇だ。
俺は畳の上に横になり、ぼうっとする。台所には、杏がいる。
ここは――。
『1杏にえっちないたずらをする　2杏にえっちないたずらをする
　3杏にえっちないたずらをする』
選択肢がひとつしかないのは気にしないでおこう。
俺は適当に、押入れをあさる。
おっ、良いものがあった。
「杏」
「なに？　朋也？」
杏は洗い物をしているので、振り返らずに訊いて来る。俺はすかさず、杏の服を少しだけ引っ張り、ある物を入れた。ただの、虫の玩具だが、その造形、手触りは本当の虫と遜色ない。
「ひゃっ？　なに？」
杏は驚いたように声をあげる。
「杏。落ち着いて聞いてくれ」

「え？　どうかしたの？」
「お前の背中に、サソリが入った」
「は？」
「今もぞもぞと動いているのがそれだ。それもただのサソリじゃない。ほんの一刺しでインドゾウでも倒せるくらい、強力なやつだ」
「……それで？」
「ゆっくりと服を脱ぐんだ。サソリを刺激しないように」
「へぇ？」
杏は振り返る。心なしか、顔が引きつっている。
「……まて、杏、それ以上動くとサソリが」
「こんなところにサソリがいるか――！」
断末魔をあげる暇もなく、杏の拳が俺の顔面に減り込んだ。

「そういえば勝平があんたに会いたがってたわよ」
俺達は気を取り直し、普通にお茶を飲むことにした。ちゃぶ台には、杏の入れてくれたお茶が二つ。
「……へー」
俺は適当に相槌を打つ。
勝平というのは、杏の双子の妹である、椋の恋人の事だ。元は陸上選手だったが、足を患い、その手術を受けた。術後は順調らしいことを聞いている。妹の椋は、勝平の面度を見るとはりきっているらしく、今は看護婦（今は看護師というらしいが）になるために看護学校に通っている。
「まだリハビリが必要なんだけど、日常生活にはそんなに支障がないみたい。椋もついてことだし」
「……そうか」
「たまにはあんたも会いにいきなさいよ」
「なんで？」
「あんた全然会いにいかないじゃない。それで、勝平が寂しがってたみたい」

そういえば、春原と会いに行ってからは碌に会ってない。勝平を男と勘違いし、勝手に惚れ込んでいた春原も、就職で地元に帰っているはずだ。必然的に、会う機会も減っていった。

「ああ――。気がむいたらな」

「気が向いたらじゃなくて、ちゃんと行きなさいよ」

「はいはい」

「『はい』は一回！」

――その後は、杏は翌日学校があるという事で、帰宅していった。

「岡崎。そこのスパナをとってくれ」

「――はい！」

素早く返事をし、的確に工具を渡す。

俺は今、芳野さんと同じ職場で働いている。高校を卒業してからぶらぶらしていた俺を、芳野さんは拾い上げてくれた。前もって言われていたが、仕事はきつかった。給料も高いとはいえなかった。動かない右肩をかばいつつの肉体労働は、想像を超える過酷さだった。だが、今までやめようと思ったことはなかった。芳野さんを含め、職場の連中は良い人ばかりだった。それに何より、俺には杏がいた。杏を守りたかった。杏がいるのに、逃げ出したくなかった。

午前中の仕事が終わった。俺は芳野さんとトラックで一旦事務所に帰ることになった。炎天下での労働で、作業着には汗が滲んでいる。中のシャツなんて、汗だらけだ。俺は首に巻いてあるタオルで汗を拭う。

事務所の待合室には、他の仕事仲間もいた。普通の会社のように、上下意識があるわけではないので、皆活気よく、昼飯を食べていた。皆弁当が多かった。家から持ってきたのだろう。大抵が所帯持ちなので、愛妻弁当ということになるのかもしれない。

かくいう俺は――。

仕事場に持ってきたリュックを漁る。しかし、弁当の手ごたえはな

い。
「あれ？」
何度も確かめたが、手ごたえは変わらなかった。
……忘れた。
わざわざ杏が短大に向かう前に渡してくれたものだ。おそらく、部屋にそのまま置いてきたのだろう。
しまったと思っても遅い。俺は仕方なく、コンビニで弁当でも買ってこうかと、席を立とうとした。
――と。
「岡崎、お客さんだ」
芳野さんがそう声をかけた。

事務所の玄関先には杏がいた。杏は職場の同僚とすれ違うと、愛想良く挨拶をしている。杏は俺以外には基本的に優しいようだった。
また、同僚も杏の表向きの魅力にほだされたのか、にやけたような笑顔を浮かべていた。
「朋也！」
俺を見つけるなり、杏は大声で叫び、手を振った。その態度に俺は思わず恥ずかしくなってしまう。周りの好奇の視線がむず痒かった。
「お弁当忘れてたわよ」
そういって弁当箱を差し出す。杏はわざわざこれを渡しにきてくれたのだ。
「あたしの愛が篭った手作り弁当忘れないでよね」
「ああ。悪かったな」
俺は弁当を受け取る。
「けど、いいのか学校は？」
「大丈夫よ。いつも定時に終わるわけじゃないし。午前中で授業はおしまい」
杏の短大は、ここから大して離れていないところにある。
「……どう、朋也、仕事はちゃんとやってる？」

杏は心配そうに訊いてきた。俺の右肩のことも当然、杏は知っている。
「大丈夫だ。ちゃんとやってる」
「――こいつの働きぶりは俺も評価しています」
と、芳野さんが会話に割り込んできた。
「実際、こいつはよくやってます。期待していた以上の働きぶりです」
「芳野さん」
俺は驚いたように声を出す。
「――藤林さん」
「は、はい！」
突如芳野さんは語り始めた。
「こいつみたいな男には、あなたのような人が必要なんです」
「……え？」
「俺達のような人間は、一人でいきてしまうと、ろくなことにはならない」
芳野さんは一人の世界に没頭しているようだった。
「役に立たないことばかりして、いきてしまう。けど、あなたがいれば、こいつは、懸命に汗水流して金を稼いでいける。それが自分のためであっても、誰かのためになっているんです」
周りの様子など気にもとめていない。
「だから、どうか、こいつを……、岡崎を」
そして、ポーズを決めた。片手で顔を覆うように。
「いつまでも、あなたを幸せにするために生きさせてやって下さい」
「はは……」
杏は驚いた様子だった。俺は、芳野さんがこういう人だとわかっている分、驚きは少なかったが。
「……ありがとうございます。何か、こういう時のために、三日三晩考えたってくらい、決まってました」
ガーン、とたらいを落とされ、脳天に直言したような音と共に、芳

野さんは項垂れる。
「――なぜそれを？」
……本当に考えていたのか。確かに、別のカップルがいたら、使いそうな言い回しではあった。
「祐くーん！」
玄関先から、また別の女性の声が聞こえてきた。再び、職場の同僚の視線が集まる。家庭的で、優しそうな女性だった。
「公子さん」
芳野さんは慌てた様子だった。そういえば、芳野さんは新婚だった。あまり奥さんと会って話したことはなかったが。噂では、少し前までうちの高校で教師をやっていたらしい。
「こら。お弁当忘れちゃだめじゃない」
公子さんは、芳野さんの額を優しく小突く。なんとなく女教師が生徒を叱っている様のようだった。実際公子さんは数年前まで教師をしていたので、間違ってはない。そして、弁当を手渡す。
芳野さんも忘れていたのか。
「……ごめん」
芳野さんは謝る。
「ふふ。別にいいわよ」
公子さんは、優しい笑顔を浮かべる。慈愛に満ちた笑顔だった。
「けど、こんなところまでわざわざ」
「――いいのよ。この子と公園に行く途中だったんだし」
公子さんの後ろには、小さな女の子がいた。後ろにいた、というより、隠れているようだった。時折顔を見せ、こちらの様子を伺っている。
「妹の風子です」
公子さんはそう、紹介した。ずいぶん年が離れているように見える。
「ほら、風ちゃん、みんなにご挨拶して」
「……」
風ちゃん――と呼ばれた少女は、ただ黙り、こちらの様子を伺って

いる。小学生くらいだろうか？　小さい彼女は、どこか小動物的な可愛らしさがあった。ただ、こちらを警戒しているのだろう。なかなか、心を許そうとはしない。
ただ、じぃ～っとこちらを見ている。どうやら、視線の先は俺に送られているようだ。
「……やあ」
俺は柄にもなく、手を軽く上げ、愛想笑いをしてみた。
「……」
幾ばくかの沈黙の後、少女は初めて口を開いた。
「変な人です」
「こら！　風ちゃん」
公子さんは、叱った。叱るとはいっても、優しい公子さんでは別段迫力はなく、その効果は薄かったが。
「風子の第六感が告げています。あの人は変な人だと」
「そんなこと言っちゃダメ。ほら、皆さんにご挨拶しなさい」
「……仕方ないです。そこまで頼まれては、断ることはできません」
……なんか、すげぇむかつく。相手は小学生だと思われるので、腹を立てるものも憚られた。
「風子です。よろしくお願いします」
そして、ペコリと頭を下げる。
「……俺は――」
「あなたは変な人です」
風子に俺の言葉は遮られる。
「こら！　岡崎さんに失礼でしょう」
「仕方がありません。ここは、岡崎さんと呼んでさしあげましょう」
胸をはってそう言われる。
「今日は、皆さんにプレゼントがあります」
風子はいった。
「風ちゃん、またあれをもってきたの？」
「はい。あまりの可愛らしさのあまり、つい、持ち歩いてしまいま

す。それに、風子はこの可愛さを世界中に広めるという天命を授かったのです」
そういって、風子は、何かを俺と杏に渡した。
……なんだろうか。木彫りのそれは、星に見えた。
一応、礼を言っておく。
「……可愛い妹さんですね」
芳野さんと公子さんがいる手前もあるのだろう。苦笑いを浮かべながら、杏はいった。
「ねぇ、風子ちゃん、お姉さんと遊ばない？」
杏は、風子にそう提案してた。杏は意外に子供好きで、（そうであるが故に幼稚園の先生を目指しているのだが）面倒みも良い。もっとも、杏が対象としている子供達より、多少は年上に見えたが。
「なにをして遊ぶんですか？」
「公園でブランコしたり、シーソーしたり」
「風子、子供じゃないです。大人です」
そういって風子は拗ねて見せた。
「じゃあ？　なにがいい？」
「お姉ちゃんと祐介さんが、夜に二人だけで行う、怪しげな遊びがいいです」
「こら！　風ちゃん！」
「ん？　むぐぅ！」
公子さんは、赤面しながら風子の口を塞ぐ。芳野さんも心なしか、顔を赤くしている。
……そういえば俺達も最近してない。
「ごめんなさいね……そろそろ私達、公園に向かいますから」
居づらくなったのか、公子さんはそう切り出す。
「……じゃあ、朋也、あたしもそろそろいくね」
杏もそう切り出す。
「ああ。ありがとな。弁当」
「うん。じゃあ、またね」

そういって、杏は踵を返す。
「祐君もまた。お仕事頑張ってね」
公子さんもそういった。風子と手を繋いでいる。
「……では、変な人――じゃなかった岡崎さん。また会いたくないですが、会わざるを得ない状況もあるでしょう。その時は、仕方ないですがまた会って差し上げます」
遠まわしに嫌味なことを言い、風子もまた踵を返す。
「……すまないな。岡崎、風子ちゃんは人見知りなんだ」
芳野さんがそう、言った。
「ええ。まあ……」
なんというか、人見知りとかそういう度合いを超えていて、敵対されていたようにしか思えなかったのだが。
「あたしも、一緒にいっていいですか？」
「ええ。構わないですけど」
杏は公子さんと風子と一緒に、公園に向かうようだった。
弁当を受けとり、休憩室に戻ると、俺と芳野さんの二人は同僚達に冷やかされた。

「それでね。朋也――」
夜、俺の部屋に、杏は来た。そして、楽しげに話しをしている。あの後は、公子さんと風子と一緒にいたらしい。杏と公子さんは存外気があったようで、仲良くなったらしい。お互い同性で似たような境遇なので、日ごろ打ち明けられない話なども、できたようだった。珍しく、杏は上機嫌だった。大抵は杏が話してくるのを、俺はただ相槌を打って、聞く側に回っているだけだ。杏はそれで満足な様子だった。
「その子面白いのよ」
「ああ。あの風子って子か」
ただむかついた印象しかなかったが、見方を変えれば面白い子でもあった。

「――風子ちゃん、長い間入院していたらしいの」
「入院？　それにしては、随分と元気だったな」
風子という名前に相応しく、まさしく風のような子だった。
「それで、その夢の中で、あんたに会ったことがあるっていうのよ」
「へぇ……」
予知夢や、既観感みたいなものだろうか。なんにせよ、不思議なことだった。
「その夢の中で、あんたに色々悪戯されたから、あんたのことがあんまり好きじゃないみたい」
――だから、初対面なのにあんなに邪険に扱われてたのか。厄介な夢だな。
俺はため息をつく。
「それにしても、そいつのくれたこれは何なんだ？」
俺と杏が貰った木彫りの彫刻が、テーブルにおいてある。
「さぁ、星じゃないの？」
「案外、ヒトデだったりしてな」
そういって、俺達は哄笑した。

何時の間にか、帰るには都合の悪い時間になり、その日杏は家に泊まっていく事になった。夕飯を食べ、その片付けをする。しばらくして、杏が風呂を沸かした。

「じゃあ、朋也。先、お風呂借りるね」
「……ああ」
杏は浴室に入っていた。狭い安アパートだ。浴室と言っても、ただの薄手のカーテンがかかっているだけだ。カーテン越しに杏のなだらかな肢体のシルエットが映し出される。　杏が服を脱ぐ音が聞こえてくる。するする、と服を脱ぐ音。その音が聞こえてくるだけで、心臓の鼓動が大きくなるのがわかる。無意味に興奮している。

「……いっとくけど、覗いたら、ただじゃすまないわよ」
カーテンから顔だけを出し、杏はそう釘を刺した。
「ああ。わかってるわかってる。覗かないから。そんな怖い顔するなよ」

「ふぁぁ」
暇だ。俺は欠伸をする。ゴロゴロと寝転がっているだけだった。聞こえてくるのは、浴室から聞こえてくる、湯船の音だけだ。
「――さて」
『1　杏の入浴を覗く　2　杏の入浴を覗く　3杏の入浴を覗く』
……待て。覗かない、という選択肢はないのか？
ないに決まっている。
ここで引いたら男が廃る。ある意味悲しくなるが。
「よし！」
俺は無意味に覚悟を決めた。
気合を入れる為に、わざわざ頭巾を被る。そして、それを鼻のあたりで結ぶ。まるで泥棒のようだった。まさしくこそ泥のように、抜き足、差し足で浴室に近づいていく。

『ふんふんふ～』
浴室からは気ままな杏の鼻歌が聞こえてくる。俺は足元にあるものを注視する。綺麗に折り畳まれた杏の服だ。おそらく、その下には下着が隠されていることだろう。
見たい。嗅ぎたい。そして、被りたい。
俺の中に言葉に出来ない程熱い衝動が込みあがってくる。
邪魔な衣類を取っ払おうとしたその時。
『……もしかして、朋也、そこにいる？』
声が聞こえてきた。
ここで「はい」などと答えたらばれてしまう。俺は身を潜め、声を消し、気配を殺した。

『……気のせいかしら』
ふぅ。胸中で安堵のため息を吐く。
俺の目的はまだ終わっていない。曇りガラス越しに、杏の肢体が伺える。ほんの一センチでもいい。こっそりとドアをずらし、杏の――。
慎重に、細心の注意を払い、ドアをずらす力を入れる。そう、気づかれないように、何の不自然もないように。
開いた。わずか一センチほどだが、片目で中を覗くことはできるかもしれない。俺は万を持して、隙間に目をあてようとした。
――だが。
『あっ。朋也！　あんたの後ろに怒ったあたしがいるわよ！』
「なに！？」
……あっ、と思った時は既に遅かった。

「……すみません。もうしません。お許しください杏様」
俺の顔面は試合後のボクサーのようにはれあがっている。
「……なんでお風呂に入っているあたしがあんたの後ろにいるのよ」
杏は呆れたようにため息を吐いた。
「それはほら、反射的なものでして」
「言い訳はいいわよ」
杏はそう言い切った。
「朋也の処置なし。結婚したらいつもこうなのかしら」
「え？　……けっ――」
「何でもないわよ！　ほら。あんたも勝手にお風呂入りなさいよ」
「背中流してくれたりしないのか？」
「自分で流しなさい！」
そういって乱暴にタオルを投げつけられる。顔面にクリーンヒットした。
「そういえばあの猪どうしてるんだ？」

杏は野良うり坊を拾って、飼っていたはずだ。人懐っこいうり坊だった。何より美味そうだった。
「ああ。ボタンのこと？　元気にしてるわよ」
「……そうか。てっきり俺はどこかの誰かが食べたものだと――」
「朋也。今なんか言った？」
「……いや、何でもないが」
「……そろそろ寝るわよ。おやすみ、朋也」
そういってパジャマに着替えた杏は寝付く。俺も明日も、朝早くから仕事があるので、寝付いた。
……ちなみに、その夜は何もなかった。残念ながら本当に何もなかった。

「――杏、これは何だ？」
「ああ。これね、この前来た時、椋が忘れてったみたい」
床には、綺麗に折り畳まれた、白い布があった。広げるまでもなく、それが何であるか察する。
仕事道具を忘れていくなよ……。
胸中で呟く。これは恐らくは、ナース服だ。研修用のものかもしれないが、別段、普段看護婦が着ているものと遜色はないだろう。ご丁寧なことに、その横には注射針が置かれている。
ナース服。それは男のロマン（と声を高らかにして）言っていい。体操服、スクール水着、そして、ナース服。これは三種の神器とも言われる。
そして、俺の中に衝動が生まれる。思わず、男の欲望の満たす為に。
「なぁ、杏、着てみてくれないか？」
「……はぁ～？」
幾ばくかの沈黙の後、杏は、呆れたようなため息をつく。
「朋也、あんた頭打った？」
「いいから、頼む。杏、このとおりだ」
俺は土下座をし、懇願する。

「あんたね……プライドってものがないの？」
「ありません！」
杏は呆れたのをとおりこして哀れんでいる様子だった。
「頼む。杏、一生のお願いだ」
「こんなことを一生のお願いにするあんたって……馬鹿？」
「そんな軽蔑するような目で見ないでくれ。これを来た杏を見れば、俺は杏のことをますます好きになる。そんな予感がするんだ」
杏は俺の迫力に押されたようだった。
仕舞には、深いため息の後、「仕方ないわね……」と洩らした。
「ひゃっほう！　岡崎最高！」
俺は歓喜した。

「……これでいいの？」
アパートの浴室から、杏はナース服で姿を現した。白いナース服は杏によく似合っていた。外見のみから言えばまさしく、白衣の天使そのものだった。
「いや、もっと心のそこから自分がナースになったと思い込んでくれ」
「……心の底から？」
「それがコスプレというものだ」
俺が力説すると、杏は呆れ顔になる。
「それで、俺は難病を患っている患者。杏がナースで頼む」
「はぁ……わかったわよ」

「ピンポーン」
俺はナースコール風に口で音を出した。玄関先の呼び出し音にしか聞こえないが。
「はい。どうなさいましたか？」
杏は笑顔を浮かべながら応答する。
「看護婦さん。実はここが……」

「ここ？」
俺はテントを張っている股間を指し、
「ナニの具合が悪くて」
「……頚動脈ってここよね。空気を注入してもいいわよね？」
そら恐ろしい顔で注射針を首筋に近づける杏。
「いえ、待ってください。看護婦さん。実は、少し風邪気味で。お薬を頂きたい」
「へぇ、わかりました。いま用意します」
「それで……自分じゃ飲めないので、飲ませてください」
「……どうやって？」
「口移し」
「……」
杏の怒りのボルテージが上がっていくのがわかる。それに反比例して、部屋の温度は低くなっていく。
「朋也〜〜」
杏は顔を引きつらせる。
「死にたいなら死にたいってはっきり言いなさいよね〜〜」
杏の風貌は白衣の天使ではなく、白衣の悪魔そのものだった。
「待て杏、話せばわかる。話せば」
……俺は死を覚悟した。
きっと、新聞の一面をにぎわすことだろう。アパートで恋人に惨殺された変死体として。
――と。
「お、お姉ちゃん」
玄関先から声が聞こえてきた。六畳もないほど狭い部屋なので、当然玄関先はすぐそこ、すぐに見える範囲だ。
「りょ、椋！」
杏は気が動転しているようだった。妹のナース服で怪しげなことをしていたのだ。姉の威厳が損なわれるかもしれない、重要な局面だった。

「……お姉ちゃん、私の看護服をきて、なにしてたの？」
「これはね、はは。これは……そう」
杏は頭を悩ませ、咄嗟に言い訳を思いついた。
「朋也の具合が悪くて、それで看病をしたたの、それで」
「それで私の服を？」
「そう。形から入るのも結構重要かな、なんて。はは」
杏は苦笑いを浮かべる。我ながら見苦しい言い訳だと思ったのだろう。
「……じゃあ、今日はお邪魔しない方がいいかな。勝平さん来てるんだけど――」
椋の後ろには、松葉杖をついた勝平がいた。
「朋也君……僕達、お邪魔だったかな？　はは」
――勝平は男のカンで、俺達が何をしていたのかを察したのか、ばつの悪そうな顔をした。
「いや。そんなことはない。是非あがっていてくれ」
「あ、あたし着替えるわね。はは」
杏はあわてて脱衣所に入っていった。

「それでどうしたんだ？　急に？」
「朋也君が全然会いにきてくれないから、こうして来たんだよ。僕、寂しかったんだよ」
勝平はぞんざいな扱いを受けたからか、不機嫌そうに顔を膨らませる。
「前は頻繁に会いにきてくれたのに、急にこなくなって」
「……それは春原がだな」
「春原？　誰だろうそれ。何か聞き覚えがあるような……ないような」
忘れられてるぞ春原……哀れな奴。
説明をするのも面倒なので、ここでは春原の存在は放置しておく。
「……もう、足は大丈夫なのか？」

「うん。何とかね。椋さんと一緒なら、多分大丈夫だよ」
勝平は答える。その横には、私服姿の椋が座っていた。杏はお茶と多少の菓子を用意していた。
「それに、大丈夫じゃなかったらここまでこないよ」
「それもそうだな」
俺達は微笑を浮かべる。杏が運んできたお茶を手に取り、口につける。勝平は猫舌だからか、何度か息を吹きかけた後に口をつけた。
「……それで、もう退院できそうなのか？」
俺は訊いた。
「うん。この分だと、近いうちに退院できそうだよ」
勝平は明るく答えた。それを聞いて、俺は安堵した。
「……退院したら、今度できる新しい病院で働くつもりなんだ」
勝平は言葉を続けた。
「新しい病院？」
「うん。今度、この町に新しい病院が出来るんだって。そこでリハビリのアシスタントを募集する予定らしくて、そこで働こうと思ってるんだ。勿論、色々と勉強しなくちゃいけないけど……」
「私も、看護学校を卒業したら、そこに看護士として配属される予定です」
椋は恥ずかしげに言った。
「……つまり」
この二人は同じ所で働くという事だった。……仕事そっちのけでいちゃいちゃしなければいいのだが……。
「それと、今日来たのは二人に伝えたいことがあったからなんだ」
二人。それは俺と杏を指すのだろう。
勝平は椋に対して、目で発言を促した。
「……私達、結婚します」
椋は幾ばくかのためらいの後、恥ずかしそうに、だが嬉しそうにそういった。
『結婚？』

俺と杏の声が重なった。意外な言葉だった。二人の仲なら、時間の問題だとは思っていたが、早急すぎるような気はした。
そして、二人は見せた。薬指につけたペアのリング。結婚の約束を示した、その証だろう。
「もちろん、まだ式をあげるわけじゃないんだ。お金もまだないし。ただ、籍を入れるだけで」
「勝平さんが退院したら、結婚するって、約束しました」
『……』
俺達は幾ばくかの間、沈黙し、
「早い。早すぎるわよ椋！　いい？　結婚ってのはもっと順序を踏まえて、互いの両親にもちゃんと挨拶をして、そしてからするものなの。大体、椋はまだ未成年でしょう」
杏は堰を切ったように説教を始めた。愛は盲目とでも言うのか、実の姉である杏の言葉にも、藤林が聞く耳を持つ様子はない。もともと杏の言うことを従順に聞く印象のあった藤林だけに、その頑なさには少し驚いた。
「お姉ちゃん、けど、その頃には私成人してるし」
「……母さんと父さんには話したの？」
「……まだ、だけど」
藤林はためらいがちに言葉を濁す。
「確かに、僕はまだ入院中で、稼ぎもない。だけど、椋さんを愛する気持ちは誰にも負けません」
困惑している椋を援護するように、勝平が口を出した。
「僕は椋さんを必ず幸せにしてみます。だから、お姉さん――」
勝平は頭を下げる。
「妹さんを、椋さんを僕にください」
真摯な態度で、そう言い切った。
杏はその迫力に押されたのか、口ごもる。
「まぁ……別にいいわよ。決めるのはあたしじゃないし。椋が良いっていうなら、それでも。あたしはただ、姉として椋が心配なだけ

で……その」
「じゃあ、お姉さんは僕達の結婚を認めてくれるんですね？」
勝平は訊いた。目は輝いている。
「……だから、認めるも何も、あたしは椋が良いっていうなら、それで」
「やったね。椋さん」
「はい。勝平さん」
二人は鬼の首を取ったかのように喜ぶ。実際、結婚に際しての一番の難敵は杏だったのかもしれない。
そこからはノロケ話を延々と聞かされるハメになる。
「それでねー椋さんがねー」
「やだ。勝平さん……」
という具合だった。正直聞いていて面白いものではないし、なぜか負けた気になる。
完全に二人の世界に入り込み、俺達など存在していないかのようだった。
ここは――。
「……なぁ、杏、俺達も見せ付けないか？」
「見せ付けるって、何を？　どうやって？」
「そうだな。例えば、一本のポッキーを二人で食べたり、同じジュースを二本のストローで飲んだり、そういう、いかにも痛いカップルのような真似を――」
杏は軽蔑の篭った目で見下し、
「朋也。そういう馬鹿な真似は、春原とやってなさい」
俺は春原と、一本のポッキーを食べあったり、同じジュースを二本のストローで飲んだり、したりする様を想像して、気分が悪くなった。

「……じゃあ、お姉ちゃん、私達はこれで」
「ばいばい。朋也君。今度また会おうね」

二人は夜になる前に帰っていった。勝平はまだ入院中なので、門限があるのだろう。
俺達は二人を見送った。

「あの椋が結婚か……」
杏は感慨深げに呟く。双子の妹である椋の結婚には、小さくはない衝撃があったのだろう。
「どうした？　杏」
「別に、なんか椋が遠くにいっちゃいそうで」
あの二人はこれから、結婚をして同じ苗字になり、そして、家庭を作り、育み、子供ができたり、色々なことを経験しながら、家族になっていくのだろう。それはある意味、先　に進むということでもある。もしかしたら、別人になってしまうのではないかという不安　みたいなものもある。それほど結婚というものが、重大なものに思えて仕方がなかった。
俺達も、するのだろうか。今はまだ現実味がなかった。
杏と築いていくのだろうか。誰かと家族を築いていくのなら、今は杏としか、俺には考え付かなかった。

「大分手馴れてきたな」
俺の仕事振りを見て、芳野さんは言った。
「……そうですか？」
「ああ。前よりは動きがよくなった」
「ありがとうございます」
珍しく芳野さんに褒められたからか、思わず頬を綻ばせる。
「一年以上働いているんだから、当然のことだ」
と、芳野さんは付け加える。
一年。もうそれだけの期間が経った。正確には、もう二年に達しようとしている。それだけの時が流れた。
変化はなだらかなものだ。日常は一見変化をしていないようで、変

化を続けていく。杏は短大を卒業し、望み通り、保育園の保母さんになった。今では、毎日のように子供達の面倒を見ている。狂暴な（本人に言ったら殺されるだろうが）杏に務まるのか不安だったが、存外似合っていた。凶暴なのは俺に対してだけで、子供に対しては理想的な保母さんだった。

俺もまた、職場ではささやかながら昇進し、仕事で使う資格も取った。多少は責任のある仕事も任されるようになった。

時は流れる。そして、この街もまた変わっていく。

変わっていく風景の中で、杏だけは変わらずそこにいた。きっと、これからも変わらないだろう。

この町にも大きな病院が出来た。総合病院というやつだった。そこに、椋も看護士として勤めることになる。勝平もそのつもりでいるらしいが、色々資格などの条件があり、今は勉強中らしい。二人は宣言どおり結婚した。金がないので、式はまだあげていないらしい。仕事中、ふとその手をとめ、虚空を見上げる。他の皆は何をしているのだろうか。高校の時、様々な出会いがあった。その中で俺は杏と出会い、結ばれた。その選択を悔いてはいないが、可能性というものに想いをめぐらせる時もある。もしあの時ああしていたら、また別の人生もあったのではないだろうか。ただのない物ねだりだ。

そんなことを考えても、何の意味はなかった。

まぁ、ただ、春原の奴は相変わらず馬鹿をやっているのだろう。この前電話をした時も、馬鹿な悪戯にあいつらしく引っかかっていた。思わず、思い出し笑いする。それを芳野さんに見られ、「大丈夫か？　お前。仕事中に一人笑いするなんて」と、心配された。

「岡崎。外回りの営業にいってきてくれ」

そう、芳野さんに言い渡され、気を取り戻した。

俺はふと歩みをとめた。仕事の外回りの途中。偶然だが、杏の勤める保育園に通りかかった。

保育園は丁度、園児が帰宅する時間帯なのだろう。保護者達は子供

達を出迎えにきている。
そこに、見慣れた姿があった。
「岡崎」
俺が声をかけるより先に、声をかけられた。
「……智代」
彼女の名前は坂上智代。俺達の一個下の学年で、生徒会長をしていた。流石にまだ学生という事はなく、今は私服を着ている。
「どうしてここにいる？」
智代は尋ねてきた。
「……杏に会いにきただけだ」
後付だが、自然と杏に会いに足が向いたのも、事実なのかもしれない。
「杏？」
智代はいまいち照合がつかないのか、疑問符を浮かべる。
「ほら。いつも俺達と一緒にいた。あの狂暴そうな」
自分の彼女を『狂暴そう』と例えるのは気が引けたが、最も端的でわかりやすい例えだった。
「ああ。彼女か」
それで合点がいくのもどうかと思うが仕方がない。
「あいつ、今ここで保母さんをやってるんだ」
「……保母さん？　意外だな。あの彼女が……」
智代は頭を悩ませた。いまいち想像がつかないのだろう。俺も同感だった。
「……智代は、どうしてここにいるんだ？」
――と。
「ママ！」
快活な声が聞こえてきた。声の主は迷うことなく、智代の前に駆けつけ、そして、智代はしゃがみこみ、抱かかえた。
可愛い女の子だった。どことなく、智代に似ている。大きくなったら、智代に似た美人になるに違いない。

俺は目を丸くした。そして、全てを悟った。
「智代」
ぽん、と肩に手を置く。
「頑張ったな」
「……なにをだ？」
智代は怪訝そうな顔をするが、構わず続ける。女の子はどう見ても三歳を超えている。つまり、俺達が知り合った頃には。
「何も言うな。俺にはわかる。お前の苦労が」
智代の苦労が瞼の裏に浮かんでくる。高校生の出産ということで、いや、もしかしたら中学生だったかもしれない。周囲からの冷たい視線もあっただろう。望まれない出産だったかもしれない。そして、これからの苦労を思うと、同情したくもなる。
「だから何の話だ？」
「それで、相手は誰だ？」
「岡崎、お前は何か勘違いをしていないか？」
「――パパ」
別の角度から、声が聞こえてきた。えらく低い位置から。
女の子は俺を見上げていた。
「パパ――？　どこにいる？」
俺は四方を見渡す。しかし、父親らしき人物はいない。
「――パパ！」
女の子はそう言って抱きついてきた。思わず、俺は抱き抱えてしまう。
「おー。よしよし……で、誰がパパだって？」
「パパ」
女の子は俺を指差し、再度そう言った。
「違う。とも。その人はパパじゃない」
智代は、否定する。
「ともちゃんっていうのか。可愛いな」
意外にも俺は、子供のあやし方に慣れていた。将来は子煩悩な親父

になるに違いない。
ともは駄々をこねるように頭を振った。
「ちがうよー。この人はパパ。とものパパ」
「だから、とも……」
そういって、智代の声は弱弱しくなっていった。
「ああ。俺はともちゃんのパパですよー。ばぶばぶ」
と、なれない、あやし言葉を使ってみる。我ながら似合ってない。
「パパ、ママ」
とももはしゃぎながら、二つの単語を繰り返す。傍目から見れば、俺達は若い夫婦のように見えたことだろう。智代も別段否定しなくなった。ともは「パパ、ママ」という単語を繰り返しながら、俺達を交互に指差す。
「じゃあ、仲良しのちゅー」
「ちゅー？　俺とともちゃんがか？」
「違うよー。ママと」
――ママ？
ともは、智代を指差した。智代は頬を赤く染めながら、怒ったように肩を震わせている。
「とも――それは」
「してくれないの？」
「しかし、とも。私とその人は――」
うるうる。と、瞳を潤ませ、ともは智代を見つめ続ける。そして、ともは涙目で訴える。うっ、と智代の目も潤む。母性本能が直撃されたようだった。数瞬の躊躇いの後、智代は何かを決意したかのようだった。
「――すまない。岡崎」
智代は瞳を閉じ、唇を近づけてくる。そして、接近してきた。息遣いが伝わってくる程近く。
「え？　ちょっと――、待ってくれ。俺には杏が――」
ともを抱きかかえているので、抵抗することもできない。唇と唇が

交差する間際。
「朋也！」
別の方向から地獄の底から沸きあがってくるような、恐ろしい声が聞こえてきた。思わず、背筋が凍った。恐怖に全身が支配され、身の毛もよだった。
その声で行為は中断される。
「公衆の面前で浮気？　ふふ。いい度胸ね。しかもキスまで？」
「杏――これだな。その、待ってくれ杏！　話せばわかる、話せば」
「死刑！」
そういって、杏は何か巨大な物体を投げた。そして、そのまま俺の意識はなくなる。

「いってぇ～。首の骨が折れるかと思った」
『ぶひぶひ～』
俺の足元には一匹の猪。かつてはうり坊だったが、今は立派に大人になっていた。こいつは杏のペットで名前をぼたんという。今は幼稚園のペットになっているようだった。立派な猪となったぼたんは立派な体格をしている。こいつを投げるとは、恐ろしい程の怪力だった。園児達からの人気も高いらしく、ボタンの周りには園児が群がっている。確かに、ペットとしては物珍しいので、わからなくもない。
「あら～、ごめんなさい。そういうことなの」
智代から事情を話された杏は、ひとり納得していた。
「ごめんね。ともちゃん」
杏は目線をともに合わせる為にしゃがんでいた。よくよく話を聞けば、杏はとものクラスの担任の先生を務めているらしく、ともは、智代の妹であるらしい。
「もうけんかしちゃだめだよ」
ともは諭すように言う。
「うんうん。けんかはよくないわよね」

心にもないことを。と、俺は思ったが、口に出さなかった。
「じゃあ、仲直りのちゅー」
「ちゅー？　誰と？」
「パパ」
ともは俺を指す。
「へ？」
瞬間、杏の表情が固まる。
「な、な、な」
杏は顔を真っ赤にした。明らかに動揺しているようだった。
「ともちゃん……どうしてもしないとだめ？」
「だめだよー」
周りからひそひそと声が聞こえてくる。周りの保護者達だった。幼稚園の出入り口で騒いでいれば、それは目を引くだろう。『あれ、藤林先生じゃない？　何しているのかしら？』『わからないけど、若い男の人を叩き倒してたわよ』『普段は優しいのにおかしいわね』といった声が聞こえてきた。
「……うぅ」
杏は呻いた。杏はそれ程キスが好きというわけではない。最初の時こそ熱烈な口付けを交わしたが、それから後にしたのは、そう何度もなかった。それに関係なくとも、人前で平然とキスできるような性格ではなかった。勿論、俺も人前ですることに抵抗がないわけではない。
ともは涙目を続ける。幼い子供の涙というものは、すべからず母性本能を打ち抜くのだろう。杏もすっかりともに絆されていた。なんだか、本気の顔つきになる。
おいおい。マジでするのか。
俺達は見詰め合った。周囲の好奇の眼差しが痛かったが、見詰め合っているうちに、そんなことすらも忘れてしまいそうだった。杏の滑らかな唇が映る。
杏は目を閉じた。そして、段々と唇が近づいてくる。俺も瞳を閉じ

た。
――と。
「姉ちゃん、いつまで漫才みたいなことやってるの？」
と、少年の声が聞こえてきた。その声に遮られ、俺達は瞼を開く。
「鷹文」
と、智代。いつからそこにいたのか、そこには少年がいた。
確か、智代の弟の鷹文だった。かつては事故で歩けなかったが、もう治っているようだ。
「帰りに河南子にアイス買ってくる約束だったでしょ。あんまり遅くなるとあいつ怒って手がつけられなくなるから早くしてよ」
「……そうだったな。そういえば、そういう約束だった」
「ほら。ともも、早くアイス買って帰らないと、河南子が『アイスが売り切れて、飢えに苦しんだ人達の間で核戦争が起ったらどうする？』とか意味のわからないことで騒ぐから」
「えー、アイスが売り切れたら大変なんだねー」
「まぁ、戦争はおきないけどさ。とにかく、早く帰ろう」
「それじゃあ、岡崎。またな」
「先生。またねー」
智代達は帰っていった。俺と杏は呆然と立ち尽くしていた。

俺達は、帰りゆくともと智代、それと鷹文の背中を見送る。俺の中には、深い喪失感があった。あともう少しで杏と――。思わず舌打ちをしてしまう。
「――しかし、何でまた智代は妹の送り向かいなんかしているんだ？」
年の離れた妹の送り向かいをすることなど、不自然なことではないのかもしれない。だが、智代を『ママ』と呼び、慕っているのは少し異常に思われた。
「あの子――ともちゃんにはね、母親がいないらしいの」
「――母親が？」

「聞いた話だけど――」
杏は事情を話しはじめた。
智代の妹のともは、智代とは異母姉妹にあたるらしい。ありていにいえば、ともは智代の父親の隠し子だった。望まれない子供。恐らく、坂上家にとって、無用な問題を引き起こす。そして、母もまた精神を患っており、蒸発した。そして、ともの前から姿を消した。
「なんだよそれ」
それはおかしい。子供が親と一緒にいられないなんていうのは。
「それで、その母親は今どこにいるんだ？」
「そんなことわかるわけがないじゃない」
今のともの家族の繋がりは、何よりも細い。両親から見放され、ただ一人。偽りの母である、智代といる。そんなものが破綻するのは、目に見えていた。
おせっかいかもしれないが、俺はどうにかしたいと思った。俺も同じようなものだった。母親は死んで、親父と喧嘩して、それで、もう他人みたいになって、とても家族なんて言えない間柄になっている。戸籍上はそうでも、俺は親父を親父だとは認めていない
だからかもしれない。
「ねぇ、朋也家族ってなんだと思う？」
杏は意味深に聞いてきた。
円満な家族もある。それはそれで好ましいことだ。だが、その逆もある。他人のように無関心に接しなければならない、そういった家族もある。
それだけの事なのかもしれない。白状だが、知らなければ、気にもならない。
だが、知ってしまった。けど、だからと言って何もできない。智代は俺の何でもない。今の俺には、杏がいる。
――遠ざかる智代とともを見送り、次第にその背中は消えていき、見えなくなった。
瞬間。別の世界が見えた。ここではない世界。同じだが違う、近く

て遠い世界。そこで俺は、智代とした。そして、ともと鷹文もいた。
そこで、俺達は、出会い、愛を育み、いくつもの障害を乗り越えながら、本当の家族になる。そして最後には、永遠に続いていく、
愛を見つける。
そんな白昼夢が俺に訪れた。
「どうしたの？　朋也」
心配そうな杏の言葉で、俺は気を戻す。
「いや、なんでもない」
今は、俺はともと、智代の幸運を祈る以外になかった。
全ての家族を幸せになどできない。全ての人を救うことなどできない。だが、せめて目の前にいる人はなんとかしたい。俺はそう、思っている。だから――。
「杏」
俺はせめて目の前にいる人だけでも。
「俺達は幸せになろう」
杏と築く家族だけは、幸せな家族にしたい、と切に思う。誰も悲しませることのない、笑顔で溢れる家族に。

「朋也、あんたちゃんとお父さんと会ってる？」
その日の夕食の時、杏はそう言い出してきた。
「どうしたんだよ。急に」
「あたし達が付き合いはじめてから、あたしお父さんと何度も会ってないんだけど」
俺と親父の親子仲の悪さも知っている。俺達の仲に何があったのか、ある程度は察しているだろう。
「ちゃんと連絡とかしてる？」
「……してない」
俺はそう答えた。嘘でもしていると言えば、場が丸く収まるだろうが、杏に対しては隠し事や嘘は言いたくなかった。
「きっと、あんたのこと心配してるわよ」

「……あいつが俺のことを心配なんかするわけないだろ」
半ば自嘲するように、俺は呟く。
「心配するわよ。親なら、誰だって子供のこと」
杏に悪気はない。言っている事も至極真っ当な事だ。ただ、俺が幼稚なだけだ。腫れ物に触れられたように、気が苛立っている。
「そう。今度二人で会いにいかない？　あたしも朋也のお父さんにちゃんと紹介して欲しいし」
会いに行く？
やっとあいつと離れられると思った。就職して、アパートを借りた時、言い様のない充足感があった。二度とあいつと会う事もない。もう、過去の嫌なこと、辛かったことを思い出さなくて良い。世界が広がり、新しく始まった気さえしていた。だけど、あいつと会ったら、それが全て台無しになってしまうような気がする。そんな恐れがあった。
「ねぇ、朋也」
「うるせえ！」
思わず怒鳴っていた。苛立ちを言葉にぶつける。
「お前には関係ねぇだろ！」
「関係ないってなによ！　あたしはあんたの――」
俺達は立ち上がり、口論になる。口喧嘩になれば、男は女には勝てない。最終的に俺が取った行動は――暴力だった。
「――つぅ！」
杏の頬が赤く染まった。杏は打たれた頬を隠すように押さえる。
「……はあ、はあ」
興奮のあまり、思わず肩で息をする。やった瞬間、後悔の念が過った。
……最低だ。杏だけは幸せにしようと思っていた。見えない人々を救うことができないなら、せめて目の前にいる杏だけは幸せにしようと思っていたのに。子供染みた動機で傷つけた。
杏は反撃してこようとはしてこなかった。その目は若干潤んでいる

ようだ。
「……ごめんね。あたし、図々しかったわよね。あんたの問題なのに……」
杏はそう言った。普段の覇気などない。ただ、肩を震わせていた。
違う。謝るのはお前じゃない、俺だ。悪いのは俺なんだ。
「……悪い。今日はもう帰ってくれ」
「でも、朋也」
杏はまだ言いたいことがあるのか、口ごもるが、
「じゃあ、またね。朋也」
手早く身支度をして、部屋を出て行った。
俺は無言で立ち尽くしていた。

その日から杏は俺の部屋を訪れなくなった。当然といえば当然だった。悪いのは俺だった。このまま終わる関係とは思えなかったが、終わってしまうのではないかという不安もあった。
杏の働いている幼稚園を訪れてみた。笑顔で園児の世話をしている杏がいた。遠目からそれを見ているだけだ。今は、会わせる顔がなかった。
夜、杏のいる家を訪れてみた。住宅街にある一軒家。そこに、杏は暮らしているはずだ。
その日は雨が降っていた。傘は持ってこなかった。小粒の雨は次第に勢いを増していき、土砂降りの雨になった。俺は雨の中、呆然とその家を眺めていた。冷たい雨も、自らを罰しているようで、逆に心地がよかった。
傍から見たら、相当な変質者だろう。ストーカーか何かに間違われても、不思議ではない。
「……岡崎さん」
杏と同じ声。だが、呼び方ですぐに違うと気づく。
「藤林か」
藤林も杏と同じく、実家暮らしだった。俺と違い、藤林は当然のよ

うに傘をさしていた。
「どうしたんですか？　岡崎さん」
藤林は怪訝そうに尋ねる。雨の中傘もささずに、自分の家の前に突っ立っていれば、さぞ奇怪に映るだろう。
「風邪、引きますよ」
「……いや、いいんだ。それで」
「お姉ちゃんと、何かあったんですか？」
藤林は尋ねる。双子の勘か、ただの洞察かのどちらかで察したのだろう。
「お姉ちゃん、中にいると思います。呼んできましょうか？」
「いや。やめてくれ。今は会う気がしない」
俺は頭を振った。
「……じゃあ、せめて私の傘に入ってください」
一本しかないので、当然あいあい傘になる。拒む間もなく、藤林は距離を詰めた。藤林との距離が、ぐっと近くなる。熱を感じるくらい近く。そうしないと濡れてしまうからだろう。とはいっても、既に俺はずぶ濡れだった。
心臓の鼓動が高くなるのを感じる。杏と同じ匂いがする。杏と同じ、熱が伝わってくる。双子だから、似ていて当然か……。
沈黙が続く。雨の音がただ流れ続けていた。
藤林が身動ぎをした。顔が近くなる。唇が見える。
藤林と付き合ってた時、杏と付き合いはじめる前、藤林と別れる前を思い出す。初めてのキスの時を、俺は思い出していた。
「……なぁ、藤林」
沈黙に耐え切れず、俺は言葉を口にする。
「は、はい！」
「……その、勝平とは上手くいっているか？」
「はい。上手くいってますけど」
あいつのことだ。椋に手を上げるなんて真似、間違ってもしないだろう。

「喧嘩したりすることはないのか？」
「それは、あります。付き合っていれば当然です」
「あるのか？」
「はい。付き合っていれば、色々なことがあります。それに、結婚すればもっと沢山、色々なことがあります。笑ったり、喜んだりすることもあれば、怒ったり、悲しんだりすることもあります。けど、どんなことも、大切な人がいれば、乗り越えていけるんです」
「……そうか」
俺は呟く。
「お姉ちゃん、家でも岡崎さんの事ばかり話してました。けど、今は、何か塞ぎこんでて、私の話もあまり聞いてくれなくて……けど、部屋から聞こえるんです。『朋也、朋也』って岡崎さんのこと、何度も呼んでました。多分、今のお姉ちゃんには、岡崎さんが必要なんです」
「……そうか」
「家にあがってください。こんなところをお姉ちゃんに見られたら、誤解されてしまいます」
藤林は頬を赤らめ、目をそむける。いつの間にか、半ば抱擁をしているかのように、お互い見詰め合っていた。これからキスをするところのように見えても不思議ではなかった。
「いや、今日はいい。また日を改める」
「……そうですか。なら」
藤林は一度駆け足で家に入り、傘を一本持ってきた。そして、それを俺に渡す。
「これ、使ってください」
「ああ。ありがとうな。色々」
藤林の言葉で、色々救われた気がする。俺は傘を差し、踵を返した。
「岡崎さん」
藤林が呼び止めた。
「占いの結果が出ました」

占い道具などは一切ないが、藤林はそう言った。そして、笑みを浮かべた。
「岡崎さんとお姉ちゃんは、きっと幸せになります」
藤林にしては珍しく、占いは当たるな、という気がした。

幼稚園には、沢山の園児達が活気よく遊んでいた。そこに、杏の姿もあった。笑顔を絶やさず、子供達の面倒を見ている。今の杏からは慈愛が満ち溢れていた。高校の頃は、世界一向いてない職業だろうとさえ思っていたが、それは間違っていたようだ。杏にとって、天職だったのだろう。
どんな嫌なことや、辛いことがあっても、子供達の前では笑顔でいられるのだから。
そろそろ、園児達が帰宅する時間だった。身支度をした園児が、保護者達に引き取られていく。杏は帰り際の園児達に微笑みながら、手を振る。次第に数は疎らになっていき、いなくなっていった。正直会い辛いという気はあった。どの面を下げて会いに行けばいいのかわからなかった。覚悟は決めたつもりだったが、決心はつかない。中途半端で情けなかったが、そんな感じだった。
――と。
『ぶひぶひ～』
唐突に足音で音が聞こえてきた。そこにいたのは、一頭の猪。人懐っこくすりついてくる。
「……ぼたん？」
『ぶひ！』
「……情けないよな俺。杏にあんな事しといて、会う踏ん切りがつかないなんてな」
独り言のようにぼたんに話しかけた。
『ぶひぶひ』
ボタンは首を横に振る。
『ぶひ！』

ボタンは声と朋に、俺の服を口で咥え、引っ張っていった。
「って、待てボタン。俺はまだ……心の準備が」
「……朋也」
杏は驚いたように目を丸くする。
ボタンに引きずられ、強制的に対面する事になった。心の準備など本当はする必要もなかった。会わせる顔がなくとも、実際に会わなければ、事態は解決しなかった。実際に会ったはいいが、言葉を上手くまとめていなかった。言いたいことはあっても、それを上手く言葉にできない。思わず、口ごもってしまう。
「……その、こないだは悪かった。全部俺が悪い。お前は俺の事を思って言ってくれていた、それがわかってたのに。俺が馬鹿だったんだ。もうあんなことは二度としない。だから――」
俺は頭を下げた。
「俺を嫌いにならないでくれ、杏」
杏はしばらくの沈黙の後、噴出すように笑った。腹を抱えて、大笑いしているようだ。
「……馬鹿ね。あんた、そんなこと気にしてたの」
一頻り笑った後、杏はそう言った。
「嫌いになるわけないじゃない」
杏は歩み寄ってきた。そして、俺の胸に、手を当てる。
「だって、あたしは朋也のことが好きなんだから。多分、誰よりも」
その言葉で、思い出す。杏と付き合いはじめたばかりの頃、言われた言葉。杏が髪を切り、まだ伸びきっていない時に言われた言葉だった。
「……けど、ほんと女の子の顔叩くなんて最低よね。あの後、頬が赤くなって、誤魔化すの大変だったんだから」
「だから、悪いって」
「わかってるわよ。そんなことといちいち気にしてられないし。だけど、覚えておいて、朋也」
杏は向き直る。真剣な顔になった。説教でもするかのように。実際、

先生なのだから、園児に躾をする時のようだった。
「あんたには、あたしがいる。いつだってあたしがいるから。辛い時や、逃げ出したい時も、あたしが支えるから。だから、一人で抱え込むような真似しないで」
「……そうだな。俺、逃げてたのかもな」
逃げていた。親父から、嫌な過去から。向き合おうともせずに、逃げていた。前の俺なら、変わらずに逃げ続けていただろう。だけど、今の俺には杏がいる。杏がいれば、きっと、何とかなる。そんな気がした。
「……今度、親父と会うよ。それで、杏、お前も来て欲しい。お前のこと、ちゃんと紹介するから」
その後、仕事を終えて、俺達は向かう事にした。随分と久しぶりだった。高校を卒業し、就職して以来、戻っていない、親父のいる家に。

夜。家に灯りは灯っていた。随分と久しぶりなので、親父がもはやここにいない可能性もあった。どこか、遠くのところに引っ越しているのではないか、そんな気もしていた。だが、それはなかったようだ。いよいよ、親父との対面が現実味を増してきた。俺は横にいる杏を見る。杏もまた、俺の気持ちを察しているのだろう。神妙な顔をしていた。杏のいる前で、逃げ出したくはなかった。
「……朋也」
俺は杏の手を握る。
「……なんでもない。しばらくこうさせてくれ」
杏は答えず、軽く握り返してきた。嫌な記憶しか思い出せない。右肩が痛んだ。昔、親父にやられた傷だ。あの事件で選手生命を絶たれ、俺はバスケを捨てた。俺は覚悟を決め、手を放す。
俺は玄関の戸を開ける。暗い室内だった。生活感などは伺えなかった。意外にも、家の中は散らかっていないようだ。埃ひとつ落ちていないといえば言いすぎだが、きちんと清掃されている様子だった。

だからこそ逆に、生活感というものが損なわれているのかもしれない。
『ただいま』などと、気軽に言うつもりはさらさらない。何というべきだろうか。いう言葉など、思いつくはずもなかった。
俺は無言で家にあがる。
「……あっ、朋也」
杏だけは「おじゃまします」と言い、丁寧に靴を直していった。
居間からテレビが聞こえる。暗い室内だった。灯りはついていない。ただ、テレビが流れているだけだ。テレビの光に映し出されるように、人が見えた。
俺は灯りをつける。
親父は何の反応も見せなかった。死んでいるようだったが、呼吸はちゃんとしていた。寝ているだけだった。まるで精気の抜け果てた餓死者のように、親父はそこにいた。
「……親父」
急に部屋が明るくなり、俺に声をかけられたからだろう。親父は、うめき声の後、目を覚ます。
「……ああ。朋也君」
そして、身を起こした。最後に会ってからそんなに立っていないのに、親父は随分と老けて見えた。何よりも、白髪が目立った。だが、あの日から変わらない、薄っぺらい笑顔を俺に向けてきた。
その笑顔に苛立ちを覚えた。そして拳を強く握った。
「朋也」
「……安心しろ杏。別に、何もしない」
俺は杏を制する。
「……久しぶりだね。朋也君。おや、そちらの女性は？」
当然ながら、杏と親父は初対面だ。高校の時付き合っていた時も、家に来ることは拒み続けてきた。親父と杏を会わせたくなかった。とても自慢できる親父だとは思わなかったからだ。
「藤林杏と申します。はじめまして」

杏は礼儀正しくお辞儀をする。
「朋也君のお友達かい？」
「いえ。朋也さんとは、お付き合いをさせて頂いています」
さん付けも敬語も杏の普段の態度から考えれば違和感があったが、親の手前だからだろう。
「……ほう。あの朋也君が」
親父は感慨深げに呟く。
「……朋也君は、今どうしているんだい？」
何も言っていないのだから、親父は何も知らない。就職した事と、一人暮らしを始める事はさすがに言ってあるが、それだけだ。
「近くの電気屋で働いてる。住んでいるところは、ここからそんなに離れていない」
「……そうか。元気でやっているなら、何よりだ」
親父は立ち上がる。そして、台所に歩いていった。
「何もないけど、お茶くらい出さないと……」

四角いテーブルには、三人分のお茶、それと、煎餅などの菓子が並んでいた。
俺と親父の間に会話はない。杏と親父が話しているだけだった。久しぶりに再会を交わした親子という間柄に俺達はなかった。
杏にせよ、場の雰囲気が悪くならないように、意識的に話題を振っている様子だった。会話が弾んでいるはずもない。笑顔も作ったものだった。
――会話の途中、電話がなった。
「俺、出るから」
話している二人を邪魔したくない、という理由もないわけではなかった。ただ、俺は場の空気に耐え切れなくなっていた。少し、一人になりたかった。
「……はい。岡崎です」

「こんばんは。こちら○○という者ですが、岡崎直幸さんはいらっしゃいますでしょうか？」
「……はい、いますが、どういったご用件ですか？」
「――はい。実は」
相手の話している内容は、大抵の用語は理解できなかった。経済情勢の話をしたり、相場の話をしたり、俺にはちんぷんかんぷんだった。ただ、相手の善意に見せかけた悪意は見抜くことができた。
「――二度とかけてくるな」
そう告げて、俺は電話を切った。

「親父！」
俺は部屋に戻るなり、怒鳴りつけるようにそう言った。
「どうしたんだい？　朋也君」
「またあんた、どうしようもない事してるのかよ」
「いったい、何のことだい？」
「落ち着いて、朋也」
杏は俺を宥める。
「……さっき、電話があったんだ」
多少の落ち着きを取り戻し、俺は話を始めた。話の内容を、覚えている範囲で。
「なんだ。いい話だったんじゃないかい」
「馬鹿かよあんた。全部あんたを騙そうとしてるんだよ。何回騙されればわかるんだよ」
俺は舌打ちをした。
いっそ他人になれれば、どれほど楽だっただろうか。けど、他人に何かなれない。こいつは俺の親父で、俺はその子供だった。どんなに嫌おうが、その事実は変わらなかった。だから、心配だってするのも当然だった。俺達は家族だったんだから。
「……騙されるって、まだそうと決まったわけじゃ」
衝動を覚えた。何かに当たりたい衝動。けど、今は杏がいる。杏の

いる前でもう、二度とそんなことはしない。そう誓っていた。
「今度から、そういう話は俺を通せ。これ、電話番号、何かあったら連絡してくれ」
俺は近くにあった鉛筆と、紙で、自分の家の電話番号を手早く記し、渡す。
「……杏、もういいだろ？」
俺は尋ねる。もう、限界だ、とばかりに。
「はい。そろそろお暇します。お父さん、お休みなさい」
「……じゃあな。親父」
去り際、俺は部屋の隅においてあった一升瓶に目をとめた。
「……あまり、呑みすぎるなよ」
そう告げ、俺達は去った。

帰り道を俺は杏と歩いていた。親父と俺の久しぶりの再会は決して円満なものにはならなかった。
「わかったろ？　俺と親父はああいう関係なんだ」
苛立ちを隠さないまま、俺はそう言った。
「……そうね」
杏は相槌を打った。
「……くそっ」
さっきのことを思い出して、胸糞が悪くなった。
「あたし、わかったことがあるの」
「なにがだよ？」
「……朋也とお父さんはやっぱり、親子なんだなって」
親子？　俺達の間に、そう思わせるような素振りがあっただろうか。まるで他人のような、俺と親父に。
「怒ってるってことは、相手のことを気にかけているってことじゃない。それに、朋也は心配してた。お父さんのことを、何よりも」
「――そんなことは――」
ない、と言い切れるだろうか。俺は言葉を濁らせた。

「本当の他人だったら、怒るわけない。なんとも感じないじゃない。怒るってことは、相手のことが気になるから。好きでいてくれるから」
好きと嫌いは対極ではないらしい。俺は親父を嫌っている。だからといって、それが好意と最も離れたところにあるわけではない、そういうことだった。
「あたしもそうじゃない。朋也が好きだから、いつも感情をぶつけてた。朋也もそう……。だから、朋也とお父さんの関係は、決して冷たいものじゃない」
「……そうか。そうかもしれないな」
俺は、頷いた。俺と親父の関係は、俺が思っている程悪いものではないのかもしれない。もし、本当の他人だったら、歯牙にもかけないのかもしれない。
「今日は、ありがとうな」
俺は杏に礼を言う。
「俺、逃げてたんだ。親父から、嫌なことから。あの家には、嫌な思い出しかなかった。親父にも。けど、逃げてても何も解決しないんだな」
「朋也は頑張ったわよ。あたしが認める。朋也は偉い」
「……お前がいたからだ」
杏がいたから、俺は逃げなかった。杏のいる前で、背中なんて見せられなかった。これから先も、俺が杏を守っていかなければならない。支えていかなければならない。こんなことが逃げるような俺ではいられなかった。
「それでも、朋也はがんばった。それは、あたしの為かもしれない。けど、ちゃんと前に進んでる」
「……そうだな」
「だから、頑張った朋也にご褒美」
「ご褒美？」
「――目、つむって」

言われるままに目を瞑る。しばらくの間をおいて、唇に感触が走った。そして、その感触が離れる。何度もしたから覚えている。杏の唇の感触だった。
杏は、初めてキスをしたかのように、頬を赤らめている。なんだか、新鮮な気分だった。
「……その、最近してなかったし。たまにはいいかなって。今は二人きりだから」
そういって体をもじもじとさせる。今更何を恥ずかしがっているのだろうか。
その仕草に、思わず俺は笑みをこぼす。
杏がいれば、多分、親父との関係も悪くはならないだろう。杏がいれば、俺はこれからも、強くいられる。杏がいれば……。
「杏」
俺は歩みを止め、杏を呼び止めた。
「俺は、お前とずっといたい。これからもずっと」
時を経て、お互いに愛し合って、そして家庭を作り、育み、喜んだり、悲しんだり、怒ったり、そんな当たり前のことを積み重ねながら、本当の家族になりたい。何でもない人生でも、杏がいてくれたら、俺は幸せでいられる。杏が幸せでいてくれるなら、俺も幸せでいられる。そんな気がしてならなかった。
「だから、杏、これからもずっと、俺と一緒にいてくれ」
「……それって、もしかしてプロポーズ？」
幾ばくかの沈黙を挟んで、杏はたずねる。
「ああ。そうだ」
俺は頷いた。
そして、杏はまた考え込むように沈黙する。その沈黙が痛かった。空気が重かった。必要以上に緊張する。
杏は、言葉にしなかった。ただ、それを行動で示した。再び行われる、熱い口付け。今度は俺も求め合うように、唇を重ねた。
しばらく唇を合わせた後、離す。杏の頬は熱っぽく、目は潤んでい

る。
「あたしも、朋也とずっといたい。これからもずっと、一緒に」
これから俺達は家族になる。一緒に愛を育んでいく。喜んだり、悲しんだり、泣いたり、笑ったり、色々なことがある。だけど、杏がいれば乗り越えていける。杏がいれば……。
「朋也、好きだからね」
俺の胸の中で、杏は付き合いはじめた頃と同じように、そう言った。

「最近、なんだか妙にはりきってるな」
仕事の最中、先輩である芳野さんに話しかけられた。
「え？　そうすか？」
「ああ。働きぶりからやる気が滲み出ている」
芳野さんは顔を隠すように、手を翳した。
「今のお前の目からは、ある種の覚悟が読み取れる。何かを守ろうとし、そして、築き上げようとしている、そういった、男としての覚悟だ」
いつもの事だったが、芳野さんは気取ったように言った。言っている内容はあたっていたが。
「まあ、やる気があるのは良い事だが、無理はしないようにな」
「はい！」
威勢良く答え、俺は仕事に没頭する。

俺達は幸せだった。なんてことのない普通の人生でも、杏がいるだけで輝いて見えた。好きな人と愛を築き、結ばれ、家庭を築く。それだけの、何てことのない、平凡な人生。それでも杏がいれば、俺は満足だった。
しばらくの時を経て、俺達は入籍をすることにした。杏の苗字は、俺と同じ岡崎になる。杏の両親にも挨拶にいった。そして、今度は、俺の親父にその旨を伝える事になった。

俺がこの家を出てから、敷居を跨ぐのはこれで二度目になる。中身は変わっていない。変わっていないのが逆に嫌だった。まだ、昔の記憶を払拭できないでいる。
「……杏、前に嫌いってことと、好きってことは遠くないっていったよな？」
答えを待たずして、俺は言葉を続ける。
「けど、それでもやっぱり、嫌いな感情は、好きとは近いとは思えない」
こうまで胸の内から嫌なものがこみ上げてくるのは、心地良いものではなかった。
「……朋也」
心配そうに杏は声をかける。まだ俺と親父の溝は埋まっていない。前よりはマシになったが、それでも埋まりきったわけではなかった。
「わかってる。ちゃんと伝えるから、そう心配するな」

親父はいつもと同じだった。薄い笑顔を、俺に向けてきた。
「……朋也君じゃないか。久しぶりだね」
「親父、今日は話があってきた」
「話って、何のだい？」
親父はいいつつ、立ち上がる。お茶を出しに、台所に向かうようだった。

「――俺、こいつと一緒になる」
俺の隣には杏がいる。普段とは違い、身形を整えていた。普段が整えていないわけではないが。
「……そうか。ついに朋也君も」
親父は遠い目をした。複雑な感情が、その目から伺えた。
「――式はいつあげるんだい？」
「まだ決めてない。金がないし。貯まるまで、しばらくかかる」
「大変だろう。僕も少しなら工面できるよ」

ここで、親父に頼るのも憚られた。そういうつもりでここにきたわけでもない。
「いや、いい。俺達二人だけで、やりたいんだ」
ここで頼っては、子供の時と同じだ。俺達はこれから、二人で生きていく。もう、親に頼るなんて真似はしたくない。
「その時は、是非お父さんもいらしてください」
杏はそう言った。
「――そうだね。けど、いいのかい。僕が行っても」
親父は顔色を伺うようにいった。俺の顔色を伺っているのか。親父の顔は随分と情けなく映る。
「別に、俺の親父なんだから、来るのは当然だ」
「そうかい。じゃあ、その時は行かせて貰うよ」
「また、招待状を送ると思います」
と、杏は伝えた。

俺達は話の旨を伝え、帰ることにした。
「じゃあ、お父さん。私達はこれで」
「……そうかい。元気でね」
「じゃあな。親父」
前ほど気まずい雰囲気にはならなかった。これは前進したと言ってもいいのだろうか。

籍を入れてからは、杏は俺と一緒に暮らすようになった。杏といる時間が増えた。仕事から帰ってくると、家には必ず杏がいた。狭い部屋だったが、杏がいるだけで全く違ったものに見えた。
「それで、どうするの朋也？」
「ああ。聞いてくれ」
式のイメージは固まっていた。芳野さんの結婚式を見てから。
「学校でやろう」
「学校？」

「ああ。俺達が三年間を暮らした、あの高校で」
様々な出会いがあった。忘れられない出会いがあった。もう一度会いたい連中がいた。
沢山の思い出がある。幾多もの出会いの中で、俺は杏と結ばれた。

日曜日の高校には、大きな人だかりができていた。そして、大勢の顔見知りが訪れてくれた。学校で式を挙げるのは、様々な問題があったが、幸村や智代が協力してくれたことにより解決した。
俺はタキシードを着ていた。杏はウェディングドレスを着るのに、相当時間がかかるそうだ。確かに、あんな面倒臭そうなもの時間がかかって当然だった。
「――岡崎」
黒髪の男が駆け寄ってきた。
「久しぶりだな」
そう言葉を続ける。
「……」
俺はしばらくの間、無言で見続ける。正直、目の前で何が起きているのか全くわからなかった。
「……僕だよ。僕。春原」
その言葉を聞いてから、昔のイメージと、重なった。そして。
「はっはっはっはっは」
思わず大笑いをしてしまう。
「なんだよその髪は、似合ってねー」
「仕方ないだろ。僕だって好きでしてるわけじゃない」
「よし。キンキンに染め直してやろう」
「会社クビになるよ」
「じゃあ、いっそのこと、スキンヘッドとか、もっとイカした髪形にしてみたらどうだ？」
「いや。似合わないから、確実に」
春原は深くため息を吐いた。

「変わってないなお前は。こっちは遠路はるばる来てやったっていうのに」
「お前も、変わったのは髪の色だけって感じだな」
俺は安堵をする。時を経ても、俺とこいつの関係は変わらない。時間は変えてしまうものだ。何もかもを。でも、変わらないものがある。
「しかし、あの杏が結婚できるなんてね。最初に聞いた時はびっくりしたよ」
「……あのな、春原」
「もう転地が引っくり返ったっていうの。この世で最も信じられないニュースを聞かされた気分さ。しかも岡崎はよくあんな奴と結婚する気になったよね。僕だったら、土下座して頼まれてもごめんだね」
「さっきからお前の後ろに、杏がいるんだ」
「え？」
春原はおそるおそる振り返る。
――と。刹那。
「ぐあああああああああ！」
漫画のやられ役のように、壮大な悲鳴をあげつつ、春原は宙を待った。
「――ほんと変わってないわね。あの馬鹿」
言いつつ杏は、ドレスを調える。
杏はウェディングドレスを着ていた。純白のドレスは、意外なほど杏に似合っていた。
しかし、ウェディングドレスを着てハイキックをかますのは花嫁としてどうかと思ったが。遠くから「おま……えも……な」という、うめき声が聞こえてきたが、無視しておく。
「あっ、岡崎さん」
「芽衣ちゃん」

小柄な少女――春原の妹の芽衣ちゃんが近寄ってきた。
「ご結婚おめでとうございます」
そういって、頭を下げる。一応、礼を言っておく。
「……あの、お兄ちゃんこっちに来ませんでした？」
「――あいつなら」
杏に蹴り飛ばされて伸びている、と言いかけてやめる。流石に式の当日に、花嫁が暴行を働いたなどというのは、イメージを損ねかねない。
「多分、猪の大群にでも轢かれて、伸びてる。けど、大丈夫だ。春原なら」
「……はぁ」
――と。
「岡崎」
別の方向から声が聞こえてきた。聞きなれた声だ。いつも職場で聞いている。
「芳野さん」
「おめでとう。岡崎」
そういって、祝いの言葉を贈ってくれた。
「な、な……」
芽衣ちゃんは口をパクパクとしている。何かに驚いている様子だった。
「も、もしかして、芳野祐介さんですか？」
声を張りつめら瀬ながら、芽衣ちゃんは訪ねる。
「ああ。そうだが――」
その返答に、芽衣ちゃんは打ち震えていた。感極まっているのだろう。
「あの、私ずっと前から、芳野さんのファンでした」
「――ああ。ありがとう」
芳野さんは、芽衣ちゃんとの会話に忙しそうだったので、俺はその場を離れた。

「わっ」
驚いたように、少女が立ち止まった。確か、公子さんの妹の、風子だったような気がする。
「岡崎さん。おめでとうございます」
風子の横には、公子さんもいた。そういってお辞儀をする。
「ありがとうございます」
「前に私達も、ここで式をあげたんです。そうしたら、岡崎さんもなんて」
「はい。覚えてます」
そう、あの時の幸せそうな二人の記憶が鮮烈だったから、俺はここを選んだというのもある。
「――風ちゃん、渡すものがあるんでしょう」
公子さんはそう促す。
渡すもの？
「――はい。では」
風子は両手を掲げ、一歩踏み出した。
「風子の長いヒトデ作り人生の中でも、最高傑作だという自信があります。これ、受け取ってください」
そういって、木彫りの彫刻を渡す。
――ヒトデ？　星じゃなかったのか。
――と。
その言葉に打たれたように、鮮烈なイメージが思い出される。姉の結婚式の為に、木彫りのヒトデを渡す少女。そして、沢山の人々の前で、式をあげる姉の姿。伝わった少女の想い。その中には、俺の姿もあった。そして、全てが終わり、少女の記憶が人々から忘れ去られても、俺は忘れなかった。最後に俺達は――。
そんな、嘘なようで、本当のような、そんな記憶が思い浮かぶ。もしかしたら、俺はこいつと――。
馬鹿馬鹿しいと頭を振りつつも、その可能性を否定しきれないでい

た。
ここではない、もうひとつの世界、そんなものがあるとしたら、そんな世界もあるのかもしれない。
「……ありがとう」
俺は素直に礼を言った。
「……岡崎さんにお礼を言われるなんて、風子、とても意外でした」
風子は目を丸くしていた。
「じゃあ、なんていったら意外じゃないんだ？」
「いえ。風子の作ったヒトデは魔性ともいえる魅力があります。非常識極まる岡崎さんでも、思わずお礼を言ってしまうのは、至極当然のことといえましょう」
うわ。殴りて。
「こら。風ちゃん、岡崎さんに失礼でしょう」
公子さんはそう諭す。
「すみません。風子近所でも評判が立つくらいの正直者ですから、つい本当のことを言ってしまいます」
謝っているのか、さらにけなしているのか、わからない。本人にとっては前者なのだろう。
「……まあ、ありがとうな、なんか」
デジャブとも取れる記憶のせいか、なんだか俺は妙に感傷的になっていた。
「……そんなに嬉しかったんですか。なんだか、作った風子も嬉しくなります」
風子は走っていった。
「せっかくですから、皆さんにもお配りしてきます。この日の為に風子は、大量のヒトデを作ってきたんです」
興奮したようにそう言って、人ごみにのまれるように消えていった。
「風ちゃん！　ごめんなさいね、岡崎さん――」
公子さんも、その後を追っていった。

「――岡崎」
そう、呼び止められた。
「智代か……」
抱きかかえるように、小さな女の子――確かともを抱いていた。
「悪かったな。色々面倒をかけて」
今日学校で式をあげられることになったのは、元の生徒会長である、智代の協力もあってのことだ。
「気にするな。私も、お前には色々と助けられた。だから、そのお礼だ」
「別に俺は何もしてないんだけどな」
俺は視線をともに移す。前に、幼稚園で智代と会った時、俺は少し助言をしただけだった。
「……それで、その子はどうするんだ？」
「本当の母親を探しにいく。私みたいな仮初の母じゃない。本当の母親を。それが、この子も望んでいることだ」
「……そうか」
ともは眠っていた。可愛らしく寝息を立てながら。
「あまり、無理するなよ」
「無理などしてない。この子のためにしてやれることは、何でもしたいだけだ」
智代は強くそういった。仮に俺が智代と同じ立場だったら、全く同じことをしただろう。
――と。
少し遠くから声が聞こえてきた。
『河南子、がっつきすぎだって』
『ただ飯が食べられるんだから、食べなきゃ損じゃん』
『けど、そんな素手で掻っ込むのは――』
『気にしない、気にしない』
『可南子、ちなみに今飲んでいるの、お酒だからね』
『え？　うっ。わちゃー！』

『わー。河奈子が急に暴れだした。一口で酔うとか、相当お酒に弱いんだね』
『ふー。喉が渇いちゃった。僕も何か飲もう』
どことなく春原の声が聞こえてきた。
『何となくお前、ぶっとばす』
『え？』
『はわちゃはわちゃはわちゃ！』
『河南子が見ず知らずの男の人をボコボコにしている』
『うわあああああああ！』
と、春原の悲鳴。
『可南子百烈拳……お前はもう死んでいる』
ドサッ、と地面に崩れ落ちる声。
『……どうして……僕はいつもこうなの』
「全く、鷹文と河南子が騒いでいるようだ。すまないな、岡崎」
「ああ」
「……パパ」
去り際、ともは寝ぼけ眼だが、うっすらと目をあけた。
「……おめでとう。パパ」
寝言のように、そういい残していった。

……杏。
俺は杏を見つけた。誰かと話しているようだった。そいつには見覚えがあった。そいつは――。
「ことみ！」
「朋也君！」
ことみは深くお辞儀をする。
「今日は、本当に本当におめでとうございますなの」
「ああ。ありがとう」
「感謝しなさいよ、朋也。ことみわざわざ外国から帰ってきてくれたんだって」

と、杏。ことみは、今は外国に留学中だったはずだ。
「朋也君と杏ちゃんの為なの。当然なの」
ことみは胸を張って言う。
それから、俺達は他愛もない話をする。高校の時の話。今の話。ことみは両親のしていた研究を引き継ぐ気らしく、卒業をしても、しばらくは海外に留まるつもりらしい。
「……今日は、朋也君と杏ちゃんにプレゼントがあるの」
『プレゼント？』
俺達は口をそろえる。
「そうなの。いっぱい。いっぱい聞いて欲しいの。私あれから上手くなったの」
「――やっ、やめなさいことみ！」
杏は瞬時に反応して慌てて止めようとする。しかし、遅かった。
ことみはヴァイオリンを取り出し、首に当てるようにして構える。
その構えは、一流のヴァイオリニストのように、洗練された構えだった。だが、それは見た目だけだった。ことみが絃を弓で弾いたその瞬間。
ギイイイイイイイイイイイ！
地獄の底から浮かび上がってくるような異音が、周囲を包み込んだ。
俺も杏も、周りのギャラリーも、思わず耳を覆う。木々が揺れ、鳥達がどこかへ避難するように飛び立っていった。
まさしく、ジャイ○ンエフェクト。周囲の人間は音の暴力により、服従せざるをえなかった。
音はやまなかった。ことみが手を止めるまで。
「……うっとり」
ことみが手をやめ、恍惚とした表情で入り浸る。拍手はなかった。
失神している者がいた。
ただただ、静寂に包まれていた。
「……もしかして、アンコールなの？」
「違うわよ！」

「杏ちゃん、そこは違うの。『なんでやねん！』なの」
「わかったわよ。言うから、もう弾かないで」
「……私のヴァイオリン、嬉しくなかった？」
ことみは、涙目で言う。
それを見て杏は動揺した様子で、
「その……嬉しかったわよ」
「じゃあ、もう一回弾くの」
「待て！　ことみ！」
しかし、俺の声は届かなかった。再び行われる地獄の演奏の中で、意識を保っていられる者はいなかった。

柄の悪い連中が闊歩している。どこかの暴力団の組員のようだった。当然のように、こんな連中を招待した覚えはない。いや、あるといえばあったのだが。
「おめでとうございます。岡崎さん」
今日、何度言われたかわからない言葉を言われ、俺は礼を返す。
有紀寧は何人もの男達を従えていた。ボディーガードか何かのようだ。有紀寧の素性を知っている俺は別段驚かなかったが、他の参加者は怖がっていたようだ。
「……皆さん、本当は心の優しい、良い方ばかりなんですけど」
有紀寧は苦笑していた。
どんなに心が優しかろうが、こんな風体をしていれば、誰でも怖がる。
「何か良い方法はないでしょうか？」
「着ぐるみでも被ってればいいんじゃないか？」
あの風体は、そうでもしないと隠せそうになかった。
「着ぐるみ、ですか。けど、そんなものが学校にあるでしょうか」
「ああ。ひとつ心当たりがある」
俺は智代の元へ向かった。

「では、皆さんこれを着て下さい」
『あい。姉御』
男達は、答え、着ぐるみを着始めた。熊とパンダの気ぐるみ。智代が学園祭の時に用意していたものだ。しばらくの時間をおいて、取り巻きの男達は着替え終わる。完璧に、熊とパンダの格好をしていた。これで風船でも配らせれば、どこかの遊園地のマスコットにでもなりそうだった。
それから、俺達は話を始めた。有紀寧の兄である和人を巡った抗争は、決着がついたらしい。宮沢和人はもう存在していなかった。有紀寧とその仲間達が、抗争を食い止める為に、その事実を伝えていなかった。しかし、有紀寧達により、その問題も解決した。争いは起こらなかった。そして、それは兄の悲願でもあった。その悲願は果たされたようだった。
「――もうすぐ、兄の命日なんです」
有紀寧は言った。
「……そうか」
「やっと、これで兄に顔向けができます」
有紀寧は笑った。
「――藤林さんはどちらに？」
「ああ。杏なら」

「これから二人の幸せになるおまじないをします」
俺と杏は有紀寧の前に並ぶ。
「……宮沢にしては、何かベーシックなおまじないだな」
俺は呟く。
「そうですか？」
「ああ。何か、遅刻しそうな転校生と曲がり角でぶつかる、とかのおまじないの方が、しっくりくる」
「……では、そのおまじないにしましょうか」
「あるのか？」

「あたしは嫌よ。それに、もうあたし達は卒業してるんだから、そんなことあるわけないじゃない」
「では、おまじないをします」
有紀寧は目を閉じて、構えた。精神を集中させているかのようだ。
しかし、その動作を途中でやめ、瞳を開く。そして、俺達を見て、
「その必要は、なさそうですね」
「どうしてだ？」
「お二人は今でも十分幸せそうですから」
そういって有紀寧は微笑んだ。

「おめでとう。二人とも」
「美佐枝さん」
美佐枝さんは猫を抱えていた。猫は気持ちよさそうに眠っている。
「美佐枝さんは、まだこの学校の寮母をしているんですか？」
「そう、まだあたしはこのしがない寮で働いてるのよ。本当、やんちゃ坊主ばかりで手を焼いてるわ。とはいっても、あんたと春原よりはマシだけどね」
俺は苦笑いをせざるを得ない。
「それにしても――」
俺と杏を見て、美佐枝さんはため息をついた。
「まさかあんた達が結婚するなんてね。はぁ。自分が売れ残ってるってのを、実感しちゃうわ」
「……はは」
俺は苦笑いを浮かべる。
「美佐枝さん！」
突如春原が現われた。勢いよく挙手をして。
「今僕独身っス！」
「……そう」
美佐枝さんは淡白に答える。
「だから、もう賞味期限が切れそうな誰も買わない残り物をスーパ

ーのレジに持っていってもいいかな、なんて、あはは」
春原は軽薄な笑みを浮かべる。
「春原〜〜」
美佐枝さんは顔を歪ませる。そして、「あっ。ちょっと岡崎、この猫抱いてて」と、猫を渡された。
「ドロップキ――――ック」
「って、うあああああ」
久々に見た美佐枝さんの見事なドロップキックで、春原は星になった。

「ありがと。岡崎」
美佐枝さんは俺から猫を受け取る。
『にゃー』
猫は鳴き声をあげた。美佐枝さんは、手馴れた手つきで、猫をあやす。その間、猫が何かを訴えるように俺を見ていた。
わかってる。美佐枝さんには、お前がいるもんな。
昔垣間見た記憶を思い出す。美佐枝さんと、そしてこの猫の。
二人の想いは、ずっと前に結ばれていた。そして、これからもずっと変わらないだろう。
だから、美佐枝さんは一人じゃない。
『にゃー』
猫は俺の気持ちに答えるように、再度鳴いた。

「おめでとう。朋也君」
勝平がそう言った。その隣には椋もいる。
「おめでとうございます。岡崎さん」
「ああ。ありがとうな。二人とも」
「おめでとう。お姉ちゃん」
「ありがと。椋」
杏と椋は、同じ笑みを浮かべる。

「――もうすぐ、式が始まるみたいです」
椋はそう言った。神父役に幸村を頼んである。
「――ああ。なら、そろそろ行かないとな」
俺達は踵を返す。
「あの、待ってください」
そう言って、椋は呼び止めた。
「岡崎さん。お姉ちゃんを、いえ。お姉ちゃんと幸せになってください」
「……藤林」
俺は幾ばくかの間を置いて答える。答えは決まっていた。
「ああ。絶対、幸せになるから。だから、お前達も幸せになってくれ」
「――はい」
椋は笑みを浮かべながら答える。
「わかったよ。朋也君」
勝平も答えた。

「――岡崎さん」
式場に着くまでの途中、そう呼び止められた。懐かしい声だった。
「――古河」
俺は驚いたように目を見開いた。ここにいるのを意外だと思ったわけではない。ただ、胸の奥底から、言いようのない感情が沸きあがって来た。そう、何かまずいところを見られたような、そんな、後味の悪くなりそうな感情を。
古河渚。俺より一個上の学年だったが、留年していて、同学年になっていた。そして、演劇部の再建を目指していた。確か、俺と杏が卒業する時も、持病が悪化して、もう一年、　三年生を繰り返していたようだ。ただ、もう卒業したのだろう。流石に制服という事もなく、私服を着ている。
それだけの関係だ。それだけの、なのに、なぜか俺の感情は渚に大

きく揺さぶられていた。
「おめでとうございます。岡崎さん。藤林さん」
笑みを浮かべながら、渚は言った。
「ああ……ありがとうな。古河」
「はい。お二人の幸せそうな姿が見れて、私も幸せになれます」
再度、笑みを浮かべる。こいつには、暗い顔など似合わない。最初に会った時のような、不安げな顔はして欲しくはなかった。
「……その、演劇の方はどうだったんだ？」
「はい。岡崎さんのおかげで、無事行うことができました」
「その、今は何をしているんだ？」
「実家のパン屋で働いてます。お父さんとお母さんと一緒に」
俺達は二、三言葉を交わし、言葉が詰まる。
「――その、岡崎さん」
呼び方に違和感を覚える。俺達はそんな関係ではなかったが、他人行儀に苗字で呼び合うのは、なぜかはわからない、ただ、何となく嫌だった。
「な、なんだ？」
「えっと……その」
俺達は沈黙を浮かべながら、しばらく見詰め合う。気まずいわけではなかった。それどころか、居心地が良いとすら感じる瞬間だった。
「おっ。なんだ小僧。今頃になって、うちの娘にしとけばよかったと後悔しているのか？」
渚の後ろから、男が現われた。
渚は慌てた様子で、
「お、お父さん」
渚の親父。確か、名前は秋夫だった。
「しかし、貴様にはもう、うちの娘はやれん。もっとも、最初から渡すつもりはないがな。はっはっは」
子供っぽく嘲笑する。年相応にはとても見えない。
「お父さん、岡崎さんに失礼です」

「まあ、いいじゃねぇか」
「そうですよ。秋夫さん」
その後ろから、女性が現われる。渚の母の、早苗さんだ。
「おめでとうございます。岡崎さん」
「……ありがとうございます」
「今日は、お二人に特製のパンを持ってきたんです」
と、満面の笑みを浮かべつつ、早苗さんはパンを取り出した。
「名づけて、ウェディングケーキパンです」
ケーキなのか、パンなのかはっきりしない。
「今回のテーマは、お二人の愛が永遠に続くように、という想いを込めて作りました」
早苗さんのパンは、パンというにはあまりにも巨大なものだった。
いつの間に用意したのだろうか。幾重にもパンが積み重ねられ、その巨大さは俺の身長を軽く越えている。巨大なパンの表面には、いくつものパン。パンの上にパンが飾られている。虹色に光っているパンがあった。和風な感じのするパンがあった。そのパンのいくつかには、見覚えのあるものだった。
「早苗さん……これって」
「はい。私の今まで作ってきたパンがこれでもかというくらいふんだんに使われています」
と、笑顔で答える。
「――おっ。岡崎、何それ、おいしそうじゃん」
都合の良いタイミングで春原が現われた。
「春原、食べてみろ」
「え？　いいの？　じゃあ、遠慮なく」
春原は、そのパンを食べた。とはいえ、一個剥ぎ取って食べただけだが。
俺達の愛が永遠になったかは知らないが、そのパンを食べた春原は、永遠になった。

「すみません。岡崎さん。私のパンのせいで」
「いえ、大丈夫です早苗さん。春原ですし」
「――早苗、もう時間じゃねぇか？」
秋夫は時計を見て、そう言った。
「そうですね。秋夫さん。私達もそろそろ行きましょうか」
と、早苗さん。
「では、岡崎さん。藤林さん。私達はこれで失礼します」
渚はペコり、と頭を下げた。渚は踵を返した。
見たことのある背中だった。既視感というやつだろうか。俺の脳内に鮮烈なイメージが走る。桜の木の下。制服を着た渚がいた。そして――俺は――。
そこはもうひとつの世界。その世界では俺と渚が付き合っていて、その途中で様々な困難があり、俺は様々なものを失い、俺は何よりも大切なものを失った。それでも、俺達は最　後には――。
そんなあるはずのない未来が見えた。渚と結婚していて、子供が生まれて、俺達は家族になる。同じ人生を歩んでいく。そんな、あるはずのない未来が。
「――もしかして、あんた渚ちゃんのこと好きだったんじゃない？」
さっきまで黙っていた杏は、そう訊いてきた。
「どうして、そう思うんだ？」
「なんていうか。女の勘というか。ていうか、態度でバレバレなのよね」
杏は深くため息を吐いた。
「結婚式からこれじゃ先が思いやられるわね」
渚に心が一時でも傾いていたのは事実だ。反論しても、空回りに終わるだろう。
「――ねぇ、朋也、あたしで良かったの？」
唐突に、杏はそう訊いてきた。
「どういう意味だ？」
「あんた高校時代モテたじゃない。それで……あたしでよかったの

かなって。椋の方がよかったとか、渚ちゃんの方が良かった、なんて思ったりしなかった？」
「あのな。杏」
俺は杏に向き直る。
「俺は凶暴で杜撰で、わがままで、短気で、男勝りで、暴力的だけど――」
そこで一旦言葉を切り、続ける。
「本当は、本当はやさして、何よりも俺のことを想っている。そんな杏が大好きなんだ」
あの時の俺の選択に悔いはない。俺は杏と出会い、杏と結ばれた。
そして、これから歩んでいく。杏と、いつまでも、どこまでも、歩み続けていく。
「……朋也」
杏は恥ずかしそうに頬を赤らめ、顔を背ける。そして、はっとしたように気づき。
「だ、だれが凶暴で杜撰で、わがままで、短気で、男勝りで、暴力的よ！」
突如憤怒を表情に表す。
「……待て、杏、それは言葉のあやでだな。杏。それはやばいって」
俺の悲鳴が響きわたった。

式が行われた。神父を務めているのは幸村だった。
「――誓いますか？」
幸村は神父の常套句で問う。二人が永遠の愛を誓うか、病める時も、健やかなる時も一緒に人生を歩んで行けるかを。
「誓います」
俺達はそう誓い、言葉にする。どんな時でも、俺は杏と一緒に歩んでいく。長い人生を。いつまでも、杏と一緒に。
そして、俺達は指輪の交換をする。この日の為に作らせた指輪。指輪はアメジストで作られていた。杏が好きな宝石。杏にはぴったり

だろう。杏はその指輪を薬指に嵌め、少し微笑んで見せた。
「それでは、誓いの証を」
俺達の知り合いが何人も見ている。しかし、今の俺達には関係ない。
杏は瞳を閉じた。それに合わせるように、俺も瞳を閉じる。
そして、唇が交差した瞬間。ギャラリーからは歓声が上がった。

俺達は幸せだった。こんなにも多くの人に祝福されて。この幸せは、いつまでも続くだろう。杏がいれば、いつまでも。
俺はこの町が嫌いだった。嫌なことしか思い出せないこの町が。でも、今は好きになれた気がする。少なからず、前よりはずっと。
杏は人だかりに向かって、ブーケを投げた。花嫁が投げたブーケを受け取った奴が次に結婚するというまじないがある。春原が必死の形相で飛び跳ね、ブーケを掴もうとする。だが、弾いた。弾いた先は、偶然渚の胸元に落ち、そして、難なくそれを受け止める。受け止めた渚は、俺に向かって微笑んで見せた。
幸せになってくれ、渚。俺はお前に何もできない。
――結婚式は終わった。だが、俺達の人生はまだ始まったばかりだ。

――式が終わってから数日して、俺と杏は親父の家に行った。相変わらず萎びた、萎びた割りにきちんと掃除のされている、味気ない家だった。

「――おめでとう。二人とも」
会うなり、親父はそう言った。そして、杏に向かって言う。「綺麗だった」と。
「……来てたのか？」
俺は訝しげに尋ねる。先日行われた結婚式、親父は来ていないものだとばかり思っていたが。
「……うん」
「どうして声をかけなかったんだ？」

「僕みたいな日陰者がいていいところじゃないと思ってね」
親父は申し訳なさそうに苦笑いを浮かべる。
「そうか」
俺は呟く。親父なりの遠慮だったのだろう。それを余計な遠慮だったと怒鳴りつけるのも躊躇われた。
――ふと疑問に思う。親父が結婚した時、俺が禄に顔も覚えていないお袋と結婚した時、どのような気持ちでいたのか。今と俺と同じような気持ちでいたのか。
「なあ、親父」
珍しく俺から話題を振った。
「なんだい？　朋也君」
「親父は、その、どうだったんだ？　お袋と結婚した時」
『どうだったんだ？』と訊いても、それはあまりはっきりとしない問いだった。
「……」
親父は考え込むように押し黙る。あまり訊かれたくない事だったのかもしれない。
幾ばくかの間を置いてから、
「幸せだったよ。今の朋也君みたいに」
親父は嬉しさと寂しさが混同したような、複雑な表情でそう言った。
「朋也君が生まれてからは、僕達は凄く幸せだった」
幸せだった。昔のことだから過去形なわけではない。幸せではなくなった。あれから二人の間に何があったのか、俺は知っている。お袋は、俺を生んで間もなく、死んだ。
「――けど」
「もういい」
俺はそう打ち切る。その話の続きは聞きたくなかった。
親父は最愛の人を失った。そして、俺を今まで育ててくれた。何があろうと、それは事実だった。何を今まで俺は親父に辛くあたっていたのだろうか。子供だった。ただ単純にそういうことだった。自

分の不幸を、全て親父のせいにしていた。それだけのことだった。
「……とにかく、今までありがとう。親父。俺はこれから、こいつと幸せになる。ずっと、こいつと一緒に」

親父との面会は、滞りなく終わった。前のようにいざこざは起きない。本来あるべき家族の姿に、また少し近づいたのかもしれない。これから、長い時間をかけて溶かしていけばいい。長い年月をかけて、凍り付いていった親父との仲を、同じくらい長い時間をかけて。その凍りが溶けた時、俺達は本当の意味で、家族になるのかもしれない。

ここは終わってしまった世界。僕と彼女以外に誰もいない世界。一面が白い雪に覆われた世界。その世界の中で、彼女は僕の体を組み立て始めた。
その終わってしまった世界。この世界に、また、一粒の光が舞い降りてきた。
それは、何？
「これは新しい欠片」
彼女は答える。
新しい欠片？
「本来は存在しない、新しい欠片」
彼女はその光の滴を受け止めた。光は掌に乗り、溶けるように消えていく。
少女はそれを確認した後、また僕の体を組み立て始めた。徐々にだが、僕の体は形づくられていく。ガラクタで出来た僕の体が。手ができ、足ができ。とりあえずだが僕の五体が揃う。僕は手を動かしてみた。動く。足もまた同じように動かせる。
この世界にはいくつもの光が溢れていた。とりわけ、新しい光が輝いて見えた。何となくだがその光は幸せそうに見える。だけど、彼女は浮かない顔をしていた。

どうしたの？
僕がそう尋ねると、彼女は「なんでもないよ。なんでも」と、首を横に振った。
だけど、彼女の顔は浮かないままだった。
組み立て終わった僕は、自分で立ち上がることができた。ぎこちない動作で起き上がり、この世界を見回す。世界には、僕と彼女以外何も存在していなかった。ただ、いくつもの光が見えるだけだ。寂しい世界だった。でも、彼女はいる。それだけが僕の救いだった。
「……ごめんね」
彼女は謝る。なぜ謝るのかはわからなかった。
どうして謝るの？
僕は尋ねる。
「もう私、君と一緒にいられそうにないの」
間もなく、光が凪いだ。光は風になり、そして、この世界を包み込んでいく。彼女に作られた四肢が大きく揺れる。けど、壊れはしなかった。強い風は四肢を大きく揺らすが、何とかその形を保ち続けた。
しかし、光は彼女の存在を消し去っていく。時を増す毎に、彼女の存在は希薄になっていく。
待って。どうして居なくなるの？
僕は彼女を呼び止める。だけど、彼女は僕を置いて、どこかへ行こうとしている。
消え去る最後の瞬間、彼女は笑みを浮かべた。
そして、言い残す。
「さようなら。私がいなくても、幸せになってね」
その言葉だけを残し、僕は一人きりになった。光は止んだ。風も止んだ。
この寂しい世界。終わってしまった世界。
その世界で僕は、一人切りになった

夢を見ていた。ここではない世界の話。それは御伽噺のようなものだった。
誰もいない世界で、俺は少女と二人きりだった。そして、その少女からも取り残されて、俺は一人きりになる。
まどろんだ意識の中で、声が聞こえてくる。
毎日聞いている声だ。
「――朋也」
「……ふぁ」
軽く欠伸をして、俺は体を起こす。寝ぼけ眼を手の甲でこする。
「おはよう。朋也」
早朝から朝食の準備をしていたのだろう。エプロン姿の杏は明るく微笑む。
「ああ。おはよう。杏」
俺はそう返す。
結婚をしてから、俺達は一緒に住むことになった。幸い俺の借りているアパートは、杏の勤めている幼稚園からそう遠くない。交通の便は良かった。
杏は手際よく朝食を用意する。今では見慣れた光景だ。何でもない朝でも、杏がいるだけで俺は満足だった。
俺達はテレビを見ながら朝食をとる。テレビには大きな病院が映っていた。この町に新しくできた病院だ。
そういえば、前にできるといっていたような記憶があった。
「……もう、完成したのか？」
あの辺りは緑が茂っていたような記憶がある。しかし、今はコンクリートが敷き詰められ、立派な駐車場になっている。
「そうみたい。あそこで椋も働くんだって」
「……そうか」
嫌な思い出しかなかった町だった。しかし、杏と出会い、楽しい思い出も出来た。この町のことも好きになれるようになった。この町は変わっていく。人が変えていく。

――鋭い音が脳内に響いた。音というよりもそれは衝撃だった。脳内に大量のイメージがなだれ込んでくる。見た事もないはずの風景。誰もいない世界。見た事もないはずの少女。
さっき見ていた夢を再び見ているかのようだ。
激しい頭痛を伴い、俺は思わずこめかみを押さえる。
「――どうしたの？　朋也」
尋常ではない俺の様子に、杏が心配そうにたずねてくる。
「なんでもない。心配するな」
俺は頭を振った。

仕事場でも頭痛がするのは同じだった。歩く度に頭に痛みが走る。記憶が混濁するように、断続的にイメージが流れ込んでくるようだった。脳裏にはあの夢が思い出される。
「大丈夫か？　岡崎」
俺の様子を見かねた芳野さんがそう声をかけてきた。傍目から見ても俺は大丈夫そうには見えなかっただろう。
「いえ。大丈夫です」
俺は頭を振りつつそう言った。
「……そうか。だが無理はするな」
芳野さんは心配そうに言った。
「はい」
俺は答えつつ、電柱によじ登る。今日の仕事は電線の修理だった。
俺は手馴れた手つき――もう何年にもなるからなれて当然だ――で、電柱によじ登る。
電柱の配線部分までよじ登る。そして、腰についているいくつかの工具を取り出す。最初は問題なかった。頭痛も治まっていた。しかし、突如頭痛が再び始まった。
早く終わらせないと。
そう思いつつ、作業を急ぐ。
後もう少しだった。手が痙攣するように震えている。自分の体が自

分のものではないみたいだ。指先の振るえがとまらない。
器具のうちのひとつを地面に落とした。数秒を置いて、地面に落下する。落ちれば、ただではすまないだろう。命綱はしていなかった。力を振り絞り、俺は作業を進める。スペアの工具を腰回りから探り当て、取り出す。そして、作業を進めた。後もう少しだ。後もう少し。
――だが、さらに大きな頭痛に襲われた。意識を一瞬で奪い去るような、激しい痛み。夢の記憶が思い出される。誰もいない世界で、俺は一人きりになっていた。そんな夢の記憶が思い出される。そして、そのまま、意識が奪い取られた。一瞬意識がなくなり、そして、体の力が抜ける。宙に放り出される。ゆっくりとした意識の中で、俺は自分の体が落　下していく事を感じた。
背中に強い衝撃を受ける。幸い、下に車が止めてあった。
ボンネットに、当たる。大きく車体が歪む。そのまま転がるようにして、俺は地面に落ちた。
背骨を強く打たれ、肺にも強い衝撃が走った。血の混じった堰を吐き出した。
「……岡崎！」
芳野さんが急いで駆け寄ってくる。混濁していく意識の中で、俺は夢を見ていた。

「――と――や、――とも――や」
断片的に声が聞こえてくる。体が痛かった。全身を強く打たれたようだ。肺も少しやられているかもしれない。呼吸が若干辛かった。何よりも頭が痛い。頭を打たれたというよりも、痛みが脳内から湧き上がってくるかのようだった。
記憶が曖昧だった。頭がぼーっとする。それに抗うように、重い瞼を開ける。目覚めの光の色は白かった。それが白い天井だったという事に、しばらくの時を置いて気づく。
そして、寝ている俺を覗きこんでいる顔に気づく。

杏。藤林杏。それが彼女の名前だった。違うクラスで委員長をやっていた。よく春原と俺が馬鹿やっていた時にちょっかいを出してきた。それくらいの印象しかなかった。
どうして杏がここに？　俺は疑問符を浮かべる。杏は瞼に涙を浮かべていた。
心配してくれるのは嬉しいが、そこまで心配されるような間柄だっただろうか。
「朋也！」
俺が上体を起こすと、杏は俺に抱きついてきた。突然の事なので気が動転する。
今の杏は何かがおかしい。そもそも、彼女はこんなに大人びていただろうか。長く伸ばした髪は相違ないにしても、落ち着いた服装に、大人びた口紅は、俺の知っている杏とはかけ離れていた。大体、うちの学校は制服指定のはずだ。なぜ彼女は私服を着ているのか皆目見当もつかなかった。
「……あたし、朋也が目を覚まさないんじゃないかって、ずっと心配して」
そういって嗚咽を洩らす。
俺の知っている彼女なら、俺に何かがあっても「ふん。良い様ね」くらいにしか言わないだろう。
「……なあ、杏、ひとつ質問していいか。いや、二つになるかもしれないんだけど」
「……なに？　朋也」
「タンスの角に頭をぶつけた、とか。拾い食いをして当たった、とかいう事はなかったか？」
「は？」
「大体、こんなとこ誰かに見られたら――」
俺は周囲を見回す。そこで、ある種の違和感にとらわれる。違和感、というか、ここは学校ではなかった。白い壁も、白い天井も、学校の保健室ではない。窓越しに眺められる風景も、学校のものとは異

なっていた。
「ここは――？」
答えを聞くまでに察する。ここは病院だろう。多分、知らない病院。
「――学校はどうしたんだ？」
「……朋也？」
杏は俺の問いに驚いたように、目を丸くした。
程なくして、医者がかけつけてきた。それから、すぐに診断が行われた。触診から始まり、簡単な質問が行われた。
俺はそれを至極普通に答えたつもりだった。
最終的に医者から返ってきた返答はこうだった。
記憶障害。記憶喪失とも言う。高校の三年の頃からの記憶を失った。今の俺は高校をとうに卒業し、就職しているらしい。正直、実感はわからなかった。浦島太郎、とでもいうのだろうか。自分だけ、別の時代に来たような感じだった。確かに、鏡で観た俺の顔は、それ相応に老けていた。
俺と同じく、医者から症状を告げられた杏は、相当ショックを受けていたようだ。うすうすは感じていた。もしかしたら、俺達の関係は、高校の時とは比べ物にならない位、親密なものになっていたのではないか。
一人の看護士から、杏の名前を呼ばれた時、それに気づく。岡崎。俺と同じ苗字で、杏は呼ばれていた。
俺達は結婚していた。家族になっていた。そんなことすら、俺は忘れた。
しばらくして、芳野さんが駆けつけてきた。そして、杏から話を聞いて、愕然としていたようだった。そして、自責し、杏に謝っていた。多分、芳野さんは悪くない。そんな気はしていた。
記憶喪失は日常の中で戻るかもしれないと医者に告げられた。原因はわからないらしいが、一時的なものである可能性もあるらしい。
その治療には、恐らくは、普段の生活に戻る方が治る可能性が高い

と告げられた。幸い、俺に目立った外傷はないらしい。高所から落下したらしいが、落ちたところが良かったらしく、重傷はしなかった。
そして、俺は家に変えることになった。親父のいるあの忌まわしい家にではない。俺は一人暮らしをしていたらしい。そこに、杏と一緒に帰る事になった。
狭いボロアパートだった。家賃はその貧相な見た目どおり、安いらしい。
杏は俺の退院祝いということで、夕飯の食材を奮発したらしい。材料から察するに、すき焼きだろうか。肉は豚肉もあるが、牛肉もあった。確かに、奮発していると言っても良かった。

トントントン。という、まな板を包丁で叩く音が聞こえてくる。なんだか、落ち着かない。同じ部屋に、同級生の女子と、二人きりでいるんだ。結婚しているとか言われても、その過程は省かれている。俺にとっては、いきなり杏が押し付けてきて、夕飯を作っているようにしか思えない。なんだか、不思議な感覚だった。居た堪れないというか。なんだか気恥ずかしい。

「おいしい？　朋也」
料理を作った杏は、微笑みながら尋ねる。俺の知らない杏の笑顔に、思わず、ドキっとする。俺の知っている杏は、そんなに優しく俺に微笑んだりしない。
「おいしくなかった？」
俺の態度を怪訝に思ったのか、心配そうにそう尋ねる。
「いや。おいしいけど。お前が料理上手いのが意外だったもんで」
杏は、むっ、と顔を引きつらせた。俺の知っている杏なら、ここで激昂して、辞書の一個でも飛んできそうなものだった。しかし、そうはならなかった。
目の前の杏は、俺の知っている杏よりもずっと大人だった。きっと、

色々な事があったに違いない。そして、俺にもまた、色々な事があったんだろう。そして、恐らくはそれを乗り越えてきた。時には杏の肩を借りながら。
「朋也。おいしいならおいしいって、素直に言えばいいのよ」
「ああ。そうだな。おいしいよ。凄く」
そう言って、再び口に運ぶ。

夕食が終わり、片付けが終わった。杏は風呂を沸かした。
「……朋也」
テレビを見ていた俺に、杏は呼びかけた。
「お風呂沸いたわよ」
「ああ」
俺は生返事を返す。
「一緒に入る？」
「……ああ。って」
思わず生返事を返してしまう。
「一緒にって？」
思わず聞き返してしまう。
杏と一緒に。今の俺にとっては、あまりにも刺激が強すぎるような気がする。一緒に風呂に入るということはお互い裸になるというわけで、つまりは俺も裸なわけで、杏も裸なわけで。もしかしたら、前は一緒に入ってたのかもしれない。だが、今の俺にとってはこれは初体験であり、未知のゾーンだった。
だが、未知故に、想像を駆り立てられるのも事実だった。

「朋也」
俺が風呂に入っていると、ガラス越しに声が聞こえてくる。
しゅるしゅると衣類を脱ぐ音が聞こえる。パチ、という、ブラのフックを外す音が聞こえた。曇りガラス越しに、杏のしなやかな肢体が伺える。

「あたしも入るね」
杏の快活な声は風呂場で響き、反響する。
「ああ」
俺は体を洗いつつ、答える。
ガラガラ、という音と共に、杏が風呂場に入ってきた事がわかる。
ただ、今は気配で察するだけだ。露骨に見るのも嫌らしく、気が引けた。
「背中、流そうか？」
後ろから、恐らくは何も纏っていない、纏っているにしても薄手のタオル一枚だろう、の杏が声をかける。
「ああ。そうしてくれ」
俺は答える。杏はしなやかな手つきで洗いはじめる。
「……と、朋也」
そして、俺の下腹部を洗っていた時、急に手を止め、恥ずかしがるように声を小さくする。
「どうしたんだ？　杏」
「やだ。朋也の、大きくなってる」
俺はその時、ほぼイキかけました。
「もう、我慢できない。杏！」
「いや！　朋也、こんなところで！」

「朋也？」
「……」
「うわ。やだ。鼻血垂らしてる」
次第に、意識を取り戻していく。
「いや。俺の身が持ちそうにない」
ただ一緒にいるだけでも、十分緊張するのに、いきなりそんな事になったら、失神でもするかもしれない。
結局俺は断り、杏に先に入って貰う事にした。

寝る時間になった。杏はパジャマに着替え、俺も用意されたパジャマに着替える。流石にペアルックではないようだ。なんとなくだが、それは痛すぎる。

「おやすみ。朋也」

杏はそう言って光を落とす。風呂上りの女の子は、独特の良い匂いがする。かいだ事のない匂い。あるのかもしれないが、それすらも俺は忘れてしまった。だから、その匂いが　　俺の鼓動を早くさせているのかもしれない。

俺は杏の横に寝ている。杏の鼓動が感じられるくらいに、近くまでいる。同級生の女の子と。本当は違う。俺達は結婚をしている。だけど、今の俺にはそうは思えない。

記憶を失う前の俺は、していたのだろうか。エロ本やビデオでしか見たことのないあれを。杏と。

夫婦だったら当然かもしれない。不思議じゃない。

無情に欲情してきた。かといって、杏のいる前では、その、処理をするわけにもいかない。かといって、手伝ってもらうわけにもいかない。

いや、いいのかもしれない。記憶はなくても、俺達は結婚していて、世間的にも何も問題はなくて。俺は健康な男で。衝動を抑えるにはあまりにも、壁がなさ過ぎて。

「……杏、眠ったのか？」

多少の時間を置いても返事がない。眠っているのかもしれない。多分、寝ている。夏場だったので、アパートは蒸れる。杏は寝返りをうつ。夜目が利いた俺の視界に、杏の胸元、　　寝顔が映し出される。

衝動に火をつけ、実行に移す動機となるには十分だった。

思わず俺は杏に覆いかぶさろうとする。

――しかし。杏の顔を見て動きを止める。杏は涙を浮かべていた。

いくつもの滴が瞼から流れ落ち、布団を濡らす。

「……朋也」

杏は俺の名前を呟く。しかし、どこか遠く聞こえた。
「帰ってきて。朋也」
――その言葉で気づく。今の俺は、今の杏にとっての何でもないという事に。今の杏にとっての朋也は帰ってきていない。今の俺は、杏と付き合う前の俺だ。つまりは、杏と付き合ってもいない。付き合ってもいないのに、そんな事をしても、きっと杏を傷つけることになる。杏が好きで、愛した朋也は今の俺じゃない。
だとしたらどうすればいい。答えは簡単だった。記憶を取り戻せば良い。杏と付き合ってからの記憶を、取り戻せば。
方法はわからない。でも、俺はやってみようと思った。

翌日、俺達は学校に行った。気分を盛り上げる為か、俺達は数年ぶりに制服に袖を通した。
随分と老けて見えるだろう。
普通、卒業生とはいえ部外者が、学校を訪れる事はできない。大抵の場合、許可が必要だった。杏は生徒会長だった智代と面識があるらしく、事情を話したところ、学校での許可が下りたらしい。

俺は杏に学校の案内をして貰う。入学し、在籍した記憶はあるが、卒業した記憶はないので、なんだか、まだ通学している気分のような、そんな不思議な感覚だった。
「ほら。朋也。ここ」
杏は校庭の一角を指した。芝生が出来ている。今はそうではないが、お昼時は昼ごはんで賑わうだろう。
「ああ。ここで、杏と、椋と、一緒に弁当を食べたんだよな」
何となく、その時の情景が目に浮かぶようだった。
学校に着く前に、ある程度杏から話は聞いていた。俺が杏と付き合うことになった理由。最初、杏は椋と俺をくっ付かせようとしていた。そして、俺と椋は付き合う事になったらしい。そして、その俺と椋を観た杏は、俺のことが好きだったと気づいたらしい。俺もま

た、杏のことが好きだった。そして髪を切って椋に成り代わり、俺の本当の気持ちを試した。そうして俺達は結ばれた。それからも、俺達の間では色々なことがあった。喜んだり、時にはいがみ合う事もあっただろう。けど、俺と杏は幸せだった。多分、そうだったと思う。大勢の人に囲まれて、祝福されて、俺と杏は結婚した。家族になった。そうなんだろうと思う。俺達は幸せだった。そうだったのだろうと、今の俺は思う。

俺達は体育館に来た。
ここでバスケのスリーオンをして、バスケ部の連中に勝ったらしい。何でも、春原の馬鹿が持ちかけたようだ。あいつらしいといえば、らしかった。杏は「まったくよねー」と笑いがなら同意していた。

俺達はグラウンドの裏にきた。体育館倉庫だろう。流石に、使われていない時は鍵がかわれていた。何でも、ここに俺と杏は閉じ込められた時があったらしい。「そしたらあんた、　上半身裸になって、『ノロイナンカヘノヘノカッパ』って、唱えてたのよね。あはは」と、杏は笑っていた。

校舎に入る。流石に授業中らしく、教室の中に入る事は適わなかった。だけど、この廊下を杏と歩いたという事は実感できる。教室でも、春原の馬鹿と、一緒になって馬鹿をやっていたのだろう。

そして、再び校庭に出た。さっきから雲行きが怪しかった。しばらくして、雨が降り始めてきた。
俺達は木陰に移動する。雨足は衰えなかった。次第に、強さを増していく。雨は土砂降りになっていった。
杏も俺も雨に濡れた。俺は横にいる杏を見る。夏場だったので、制服は夏服だった。薄手のブラウスは雨に濡れたので、くっきりとブラジャーの跡が見えていた。杏はそれに気づいている様子もない。

何となく罪悪感と羞恥に囚われ、俺は視線を外す。杏の髪もまた濡れていた。長い髪は雨に濡れ、何となく艶やかな感じがした。
「ねぇ、朋也」
「……なんだ？　杏」
「あたしを抱きしめて」
唐突に言われたので、少し驚く。
「は？」
「こう、後ろからぎゅっって」
「……ああ」
訝りながらも、言われたとおりにしてみる。
後ろから手を回し、杏を抱きしめた。雨で回りが冷たく感じられるからか、杏の体温は、一層温かく感じられた。
「覚えてる？　朋也」杏は言って、「って、覚えてるわけないわよね～」と、自虐するように呟いた。
「昔、朋也はあたしにこうしてくれたの。こうして、馬鹿なあたしを慰めてくれてた」
杏は寂しげに、悲しげに呟く。
思い出せない。思い出せるにしても、それは陳腐な妄想にすぎない。今、俺は杏を慰めることすらできない。嘘でもいいから慰めてやりたかった。けど、ここで記憶が戻ったと嘘をつけば、余計に杏を傷つける事になるのではないか。悲しませることになるのではないか。そんな気がした。
「……それでね。その時椋と付き合ってたあんたに言うの。好きだって。自分で椋とくっ付けたのに。それで、あたしは、あんたのことが好きだって気づいたの」
――杏とそうしている間に、雨は止んでいった。夕立だったのだろう。激しい雨は嘘だったかのように、急速に止んでいった。
「雨止んだわね」
杏はそう呟き、
「次に行くところが、多分、最後。そこで駄目だったら、今日はも

う帰ろう」
俺達は校舎裏に来た。夕暮れの光が、世界を赤く染めていく。俺と杏以外に誰もいなかった。学校の生徒は部活か、既に帰宅しているのだろう。
「ここでね。あたしは朋也に告白したの」
杏はそう言った。
「その日も、こんな綺麗な夕焼けだった」
杏は夕日を見つめる。赤い太陽が世界を赤く照らしている。
「朋也が好きって、あたしは言ったの」
杏は一歩、一歩と、歩み寄ってくる。そして、俺の頬を撫でるように手を伸べた。
……ごめん。杏。まだ思い出せそうにない。
「あたしはね、朋也が好き。前も好きだったけど、今はもっと好き。ずっと、朋也のことが好き」
杏は俺の胸に顔を埋めた。
「なのに……」
杏は小刻みに体を震わせていた。嗚咽していた。
「あたし怖い。朋也が、あたしのこと。あたしの事もう思い出せないんじゃないかって。あたしのことも忘れちゃうんじゃないかって。あたしを好きだって言ってくれた事も、忘れちゃって、もう二度と思い出せないんじゃないかって。朋也とあたしの思い出が、もう全部嘘になっちゃうんじゃないかって」
涙で俺の胸を濡らしていく。
「杏」
短い時間だった。俺が杏と、俺のことをこんなに想ってくれている杏と一緒にいられたのは。けど、十分感じられた。
俺は杏のことが好きだ。記憶なんて関係ない。そんな事関係なく、俺は杏のことが好きだ。
「……杏。前はお前から告白したって言ってたよな。だから、今度

は俺から言う」
俺は杏の顔を向かせる。そして、見詰め合う。杏の顔が目の前にある。涙で顔を濡らしていた。
「俺は、杏、お前のことが好きだ」
杏は驚いたように、目を見開いた。
「……朋也」
「記憶のことなんて関係ない。俺はお前のことが好きだ。多分、誰よりも、お前の事が好きだ。だから、杏、俺と――」
一瞬が永遠になったような気がした。そして、俺は言う。
「――俺と付き合ってくれ」
体裁としては、俺達は結婚してきて、そんな付き合うなんて問題ではないのだろう。だけど、これには大きな意味があった。
杏は答えず、唇を重ねてきた。涙で濡れた顔で、熱く、唇を交わす。それは俺達が何度も経験したキスだっただろう。だけど、俺にとっては初めてのキスだった。
きっと、これから始まるのだろう。俺達の新しい恋が。

唇を交わしている最中だった。脳髄に衝撃が走った。脳から全身に響き渡るような衝撃。
そして、記憶が蘇ってくる。それは一瞬の間の出来事だった。生まれた時の記憶。顔も覚えていない、俺が生まれてからすぐに死んだ母親の記憶。俺と手を繋いで歩いた親父の記憶。新しい家での生活。初めて親父に玩具を買って貰った時。小学校に入学した時。運動会や遠足の思い出。中学校に入り、俺はバスケで活躍していた。高校もバスケで入れた。俺には自慢できる事なんてバスケくらいしかなかった。けど、高校に入ってすぐ、親父と喧嘩して肩を壊して、バスケ部を辞めざるをえなくなった。そこからはろくでもない高校生活が始まった。中学時代には想ってもいなかった、怠惰で自堕落な生活だった。けど、俺はそこで杏と出会った。杏と出会い、全てが変わった気がする。そして、俺の人生も意味があるものになった。

杏。
最後に思い浮かんだのは杏のことだった。
俺達の出会いが間違ったものだったとしても、俺は決して後悔はしない。俺はお前と出会えて、そして、これまで生きてこられて、幸せだった。
杏の声が遠くから聞こえてきた。俺を呼ぶ声。
だけど、俺はその声に応える事は適わなかった。俺の意識は、黒い闇の底に沈んだ。

どうして、彼女は僕を置いていなくなったのだろうか。僕達は約束したはずだった。二人で、この世界、この誰もいない寂しい世界を抜け出そうと。そう約束したはずだった。なぜかはわからない。けど、彼女は僕の前からいなくなった。それだけは確かだった。
僕はいなくなった彼女を探して彷徨った。だけど、どこにいっても、彼女はいなかった。
この世界に残ったのは僕と、彼女の大切にしていた欠片達だけだ。
欠片達は、どれもが楽しそうに輝いている。辛い事や、苦しい事があっても、どれもが最後には必ず、幸せそうになっていた。
もしかしたら、彼女がいなくなったのもこの欠片が原因ではないか。
彼女がいなくなる前に手にしていた欠片。光を発しているその欠片。
僕はその欠片を手に取ってみた。

朋也はあたしの前で突然倒れた。記憶を失い、これから築きあげていこうとした矢先だった。あの日から、朋也は目を覚まさなくなった。
「……朋也、お願い。目を覚まして」
何度も泣いて、何度も呼びかけた。だけど、朋也は何も応えなかった。
医者にも原因はわからなかった。手の施しようはなかった。
朋也との思い出を思い出す。

朋也と過ごした学校生活。朋也と帰った道。朋也と寄った商店街。
朋也と、この町で過ごした記憶。朋也の笑顔が思い起される。
「――お姉ちゃん」
背後から声をかけられた。
「椋」
すぐに誰か気づく。双子なら当然だった。朋也のいる病院は、椋の勤めている町の病院だった。巡回の途中だったのだろう。看護服を着た椋がいた。
――もしかしたら、あたしのせいかもしれない。朋也がこうなったのは、あたしのせいかもしれない。そんな疑念を抱き始めた。
「朋也がこうなったの。もしかしたら、あたしのせいかもしれない。あたしが朋也と付き合わなかったら、あの時、椋に譲ってればこうならなかったかもしれない」
あの時、あたし達が付き合っていなかったら、もしかしたら、こうなっていなかったのかもしれない。
あたし達の出会いがもしかして、間違ったものであったとしたなら。あたし達は、出会わない方が。
あたしが朋也のことを好きにならなければ良かったのかもしれない。
「――お姉ちゃん」
椋は叱責するように言った。
「私、怒るよ」
「……椋」
「岡崎君とお姉ちゃんは、幸せそうだった。岡崎君とお姉ちゃんは、あたしと、岡崎君が付き合ってた時よりも、お姉ちゃんと付き合ってる時よりも、ずっと幸せそうだった。だから、多分、これからも、お姉ちゃんと岡崎君なら、ずっと幸せなんだろうと思った。だから、あの時私は身を引いたの。だから、そんなこと言わないで。お姉ちゃんと岡崎君は、ずっと幸せでいて。これからも、ずっと。ずっと幸せに。どんなことがあっても、幸せに」
「椋」

あたしは馬鹿だった。朋也との出会いが間違いだったはずがない。
どんなことがあっても、何があっても、朋也と一緒に乗り越えていこう。そう誓ったはずだったのに。
「お姉ちゃん」
あたしと椋は見詰め合い、微笑んだ。

「岡崎。岡崎はいるか？」
唐突に声が聞こえてきた。

「……坂上さん？」
「そうか。今はどっちも岡崎だったな」
智代は持ってきた花束を、どこかに置いた。
「岡崎の具合はどうなんだ？」
智代はそう訊いてきた。
岡崎――朋也のことだろう。
あたしが首を横に振ると、
「……そうか」
と、だけ答えた。芳しくないと察したのだろう。
そうして、智代は眠っている朋也に語りかけはじめた。
「久しぶりだな。岡崎。元気か？　……まあ、元気じゃないからこう、入院しているんだろうけどな」
そういって、微笑する。
「あたしは、あの子を。ともを母親の元に帰した。見つけ出すまで大変だったんだ。私と鷹文と、あまり役に立たなかったが、河南子と協力して。多分、それがともにとっての帰るべき居場所だったんだと思う。これも、お前のおかげだ」
智代は少し寂しげだった。ともちゃんがいなくなって、寂しいのだろう。
「正直、寂しいし、辛かった。あの子といるのが、私の生き甲斐だったから。ずっと、ともと一緒にいたかった。でも、くよくよして

なんかいられない。私が悲しそうな顔をしていたら、とももきっと悲しむ」
智代は気丈に言ってみせた。その気丈さは彼女によく似合っていた。
「――ところで、なぜ入ってこない？　お前も岡崎の見舞いに来たんじゃないのか？」
と、智代はドアの方に向かって言い放った。

「……よう、岡崎」
声を震わせながら、黒髪の男は現われた。
『……』
「僕だよ！　僕」
あたし達は沈黙の後、哄笑する。
「あっははは。なによ陽平その髪」
「――その反応はもう飽きたよ」
陽平はため息を吐く。
「さっき廊下で行き会ってな。せっかくだから、一緒に来る事にしたんだ」
と、智代。
春原の動作はどこかぎこちない。緊張しているかのように肩を震わせている。
あたしと、坂上さんだろう、を見比べるかのように凝視している。
「どうしたの？　陽平」
「いや。なんというか。檻の中に二匹の虎と閉じ込められているようで、いてもたってもいられないっていうか」
「あ？　何か言った陽平？」
「何か言ったか春原？」
殆どタイミングが揃っていた。
「いえ。なんでもありません！」
春原は背筋をいような程伸ばし、答えた。
それからも、大勢の人が見舞いに来てくれた。

「お邪魔します」
と、ペコりとお辞儀をして風子が入ってきた。その後ろには芳野さんと公子さんもいる。
「岡崎さんがご病気ということで、風子がわざわざお見舞いに来てあげました」
風子は胸を張りながら言う。
「こら。風ちゃん、偉そうに言わないの」
と、公子さん。
「悪いな、岡崎。静養していたいだろうが、風子ちゃんがどうしても付いて来たいらしくてな」
と、芳野さん。
「祐介さん。岡崎さんが勘違いするような事言わないでください」
と、風子。
「風子、岡崎さんのことは好きではありません。どちからというと、好きかもしれないけど、嫌いかもしれません。けど、本当は少しだけ好きかもしれません」
風子は曖昧に言葉を濁す。
「これ、あげます。だから、岡崎さんも早く元気になってください」
風子は星のような彫刻を贈った。
それから芳野さんからも励まされた。公子さんもまた、優しい言葉を贈ってくれた。

「……朋也君いる？」
今度は勝平も来てくれた。その横には椋もいる。
「うん」
「寝てるんだね朋也君。今はどんな夢を見てるのかな」
勝平は朋也に歩み寄っていった。
「昔、僕は朋也君に出会って、椋さんに出会って、凄い励まされたんだ。それで、手術を受ける決意がついたんだ。これも、全部朋也

君のおかげだよ」
朋也は答えない。ただ、眠っているだけだ。
「……だから、今度は僕の番だと思う。僕が朋也君を励ましてあげる番だと思う」
「……勝平さん」
と、椋。
「なんて言えばいいかな。『頑張って』かな。って、何を頑張るのかもよくわからないけど。
朋也君には、僕に椋さんがいるように、杏さんがいる。だから、僕の励ましなんて必要ないのかもしれない。だから、こう言うね。二人とも、幸せになって。僕達も幸せになるから」
勝平はあたしを見据えた。
「後は朋也君をよろしくね。杏さん」

朋也の様態は変わらなかった。ただ、時間だけが過ぎていく。二人で、幸せな記憶を刻むはずだった日常は、こうして塗りつぶされていく。けど、あたしは幸せだった。朋也といられれば、それだけで。ある日、朋也は高熱をこじらせた。原因不明の高熱だった。病院はその対処に終われ、様々な措置を施した。だけど、その効果は期待できなかった。朋也の熱が引く事はなかった。呼吸が苦しそうだった。
「朋也！　朋也！」
あたしは、朋也の手を握った。熱が伝わってきた。熱い程、体中の水分を奪えてしまえる程熱かった。
あたしの後ろには、椋と勝平が見守っている。
二人もわかっているのだろう。もしかしたら、これが最後になるかもしれない。
「嫌。朋也、お願い朋也。あたしを一人にしないで」
あたしは泣き叫ぶ。それくらいしか、もうできる事はなかった。
朋也は目を開いた。虚ろな目だった。だけど、あたしをしっかりと

見据えていた。
「……朋也。朋也」
怖かった。もし、目を閉じたら、そのまま開く事がないんじゃないかと思ってしまう。それが怖かった。
朋也に置いていかれて、あたし一人になってしまうんじゃないかって。そう思ってしまうのが怖かった。
朋也は微笑んだ。あたしに微笑みかけた。そして、瞼を閉じる。
そのまま、動かなくなった。
あたしは朋也の名前を、泣き叫んだ。

――その時、世界が光で満ちた。

あたたかい光だった。この世界は、暖かい光で満ち溢れていた。
ひとつひとつの欠片が、僕を包み込んでくれているかのようだった。
そこから作り上げる。もう一度だけ。彼女が僕にそうしてくれたように。
長い時間がかかった。この世界にある欠片を全て集めだし、そして、それを重ね始めた。
全ての光が輝きだした。そして、もう一度だけ彼女の姿を見る事ができた。
僕と別れた時と変わらない、彼女の姿を。長い時間がかかった。本当に、長い時間が。だけど、僕は彼女ともう一度めぐり合うことができた。それはもう一度だけかもしれない。　だけど、僕にはそれで十分だった。
「……本当はね。もう私、ここにはいられないの。この欠片の中には、私がいないから。私のいられる世界じゃないから。だから、私はこの世界から姿を消したの。この世界では私は存在できなくなった。私は生まれてこなかったから」
少女はそう言った。
じゃあ、どうすればいいの？　僕は訊いた。

彼女は頭を振った。
「どうすることもできないの。だけど、あなたが気を病む必要はないの。これは仕方のないことだから」
彼女は寂しげに言った。
「もうすぐ、この世界はなくなる。私が存在できなくなることで、この世界はその役割を終える。だから、あなただけでもこの世界から、元の世界に戻って」
元の世界？
「ここではない世界。遠くて近い。その世界とこの世界に、あなたは存在している。そして、私はもうどちらの世界でも存在できなくなっている。可能性の中のひとつが費えてしまったように。私が存在できる世界が、存在できない世界に塗りつぶされたように、私という存在はその姿を消してしまう」
少女は僕の顔を撫でた。
「だけど、私がいなくなったら、欠片達もなくなってしまう。だから、あなたはこの欠片を持って帰って。もとの世界に。そうすれば、あなたも、元の世界も幸せになる」
光が集まっていく。僕の体の中に入っていく。
「最後に、唄って。もし、あなたに大切な人ができたなら、この唄を唄って。そして、聞かせてあげて」
だんごっ。だんごっ。大家族。だんごっ。大家族。
僕達は唄った。手を繋いで、唄った。
世界は崩壊を始めていった。その世界の中で、僕は唄った。
前にも体験したように、風が凪いだ。唐突に白い光が、風となり、僕の体を薙いで行く。
僕と彼女の手が切り離されていく。
そして、僕の体は散り散りになっていった。
彼女との、永遠の別れ。
最後に、彼女は言った。
『ずっと、幸せにね。パパ』

光が満ちていた。町には光が満ちていた。
「――朋也、朋也」
泣きじゃくるような声が聞こえる。いつも聞いていた声だ。俺は杏の手を握り返す。
「――朋也！」
杏は一転して歓喜をしたように声を高める。
光に包まれていた。町は光に。雪のような光が舞っている。今は夏場だ。雪なわけがない。けど、俺にはその光の意味がわかる。
それは欠片だった。この町の幸せな欠片。いくつもの欠片があった。俺の知っている人達の欠片。そして、今の俺達の人生もひとつの欠片となっている。
俺達の人生に幸あれ。
祈るまでもない。今の俺達は間違いなく幸せだったのだから。
そして、この町と住人に幸あれ。
今、この町は幸せの光で満ちている。
これから、杏と歩んでいく。この町で、ずっと、幸せに。
俺は唄を口ずさんだ。彼女の好きだった唄。多分。また聞かせてあげたくなる。

リハビリを兼ねて病院内の敷地を歩いていた。そこら辺はちょっとした公園のようになっていた。
そこで、歌が聞こえてきた。確か、昔に、テレビから流れていたのを聞いた事がある。正確に言えば、高校の文化祭の時聞いた事のある歌だ。
『だんご、だんご、大家族。だんごだいかぞく』
ついでに言えば、聞き覚えのある声だった。
「……渚」
何となく、無意識に言葉が漏れた。
「あっ。岡崎さん」

渚は俺を見止めると、ペコりと頭を下げ、会釈する。
「……どうしてこんなところでだんご大家族なんて歌ってるんだ？」
「いえ。良いところでしたので。その、気分がよくなるとつい歌ってしまうんです」
渚はそう説明した。渚らしいといえば渚らしい。
「どうしてこんなところに？」
「それは、岡崎さんのお見舞いに来ようと思いまして。それで、これを」
渚は袋を見せる。何か食べ物でも入っているのだろう。
「お母さんの新作パンです。これを岡崎さんにと――」
「気持ちだけ貰っておくよ」
俺が即答をする。
「気持ちだけですか？　出来ればパンも受け取って欲しいです」
「ああ。そうだな。とりあえずは受け取っておく」

明らかに姿かたちのおかしいパンの中に、まともなパンが入っていたので、作為的にそれを取り出す。おっさんの作ったパンだろう。
「なあ、古河。変なこと聞いていいか？」
「はい。何でしょう」
どう考えても、誤解されるような事だった。
「もし、別の世界があって、そこで、俺達の子供が生まれていたら、どう思う？」
「え？　それはどういう？」
渚は頬を赤らめ困惑した。
「いや、変な意味じゃないんだ。誤解しないでくれ」
とはいえ、誤解しない方が無理というものだ。
渚は何度か深く息を吸っていた。気を静めようとしているのだろう。
そして、笑顔で答えた。
「きっと、それはすごく素敵なことですね」
そして、再度頬を赤らめた。

「その、私と岡崎さんに、子供が生まれるなんて」
もしもの世界。ここではない世界。
その世界で生まれた娘に、俺はあの時祝福された気がする。俺は渚に、その時の話をしてみることにした。
「そうなんですか。そんな事が……」
「それで、その子が言うんだ。もし俺に大切な人ができたら、一緒にだんご大家族を唄ってあげてくださいって。なんだかお前みたいだろ」
「そうですね。私も、同じ事を言うかもしれません」
そして付け加える。
「もし、お二人に子供が生まれたら唄ってあげてください」
渚は口ずさんだ。
だんごっ。だんごっ。大家族。だんごっ、大家族。
俺もそれに合わせて口ずさむ。
その時。
女の子の姿が見えた。白い服を着た女の子。一瞬見えただけだ。だが、微笑んでいるような気がした。だけど、その少女は幻のように消えていった。
錯覚だったんじゃないか。そうも思う。だけど、それは多分違う。
彼女はそこにいたんだ。
さようなら。
そう手を振っていた。

「朋也――！」
遠くから杏の声が聞こえてきた。

「岡崎さん」
渚はそう呼びとめ、
「お二人とも、幸せになってくださいね」
「ああ。幸せになる。だから、渚、お前も幸せになってくれ」

渚だけじゃない。この町に住む全ての人達が、幸せでいて欲しい。
そう、切に願う。
渚は笑顔でそれに応えた。

「誰と話してたの？」
そう聞く前に、後ろ姿で渚とわかったのだろう。
「もしかして、浮気？」
「そんなわけないだろ」
少し語気を強めて否定する。
「冗談よ。けど、浮気は男の甲斐性っていうし。甲斐性なしの朋也には関係ないわよね」
「それ、なんかむかつくからな」
「けど、本当に浮気しないでよね。渚ちゃんが相手だったら、あたし勝てそうにないし」
「あのな。いい加減怒るぞ」
「うん。怒って」
杏は首肯した。
「怒ってくれてる間は、あんたがちゃんとあたしのこと好きでいてくれるってわかるから」
付き合ったばかりのときも、杏はそう言っていた。
「ああ。怒る。俺が世界で一番好きな杏の事を馬鹿にされたんだからな」
「うわ。自分で言ってて恥ずかしくならない？」
杏は哀れんだように言う。
「それを言うな。恥ずかしくなるから」
「けど、嬉しかった。世界で一番好きだからなんて。だから――」
杏は唐突に口付けをした。唇に温かな感触が走る。
俺達は長い間キスを交わし、名残を惜しむように離した」
「朋也。好きだからね。ずっと、ずっと。いつまでも、あたしは朋也の事が大好きだから」

俺達は、怒ったり、悲しんだり、喜んだり、様々な経験を積み重ねながら、この長い人生を歩んでいく。
これからも、杏と一緒に。
そして、その末に。
俺達は本当の意味で、家族になるんだ。

エピローグ。

――数年後。

幼稚園の前には無数の人だかりができていた。保護者が幾重もの列を作っている。
今日は入園式だった。盾看板や花飾りなど、幼稚園は様変わりをしていた。そこに俺は、珍しくネクタイとスーツで着飾っている。面倒なので拒んだが、杏がそれを許さなかった。何でも、自分が先生をやっている幼稚園で粗相は許さないらしい。意外としっかりした奴だった。まあ、母親の自覚が芽生えてきたのだろう。
そう、今日の入園式には特別な意味があった。俺が入院してから、しばらくして、杏は妊娠した。それから、順調に、とはいえお産には多大な負担がかかったが、子供が生まれた。そして、それから三年の時が流れ、杏の勤めている幼稚園に入園する事になった。
他の園児と差別が起こらないように、杏のクラスには、入れないらしいが。
俺は幼稚園に入った。しばらく、巡回するように幼稚園を回る。入園式は体育館（とはいえ、小規模なものだ）で行われるらしい。それまではしばらく、幼稚園内を見て回る事にした。様々な置物。どれも園児の作品だろう。似顔絵などが飾られていた。
子供が生まれてから。多くの事がわかった。親がどれだけ苦労して子供を生み、そして育てているのか。どれ程の愛が注がれているのか。俺達にはわかってきた。これからも、多くの困難が待ち受けて

いる事だろう。だけど、俺達なら乗り越えていける。そう思う。それが家族なんだと。
俺は、一度外に出た。外も多くの保護者と賑わっていた。杏は入園式の準備が忙しいらしく、当然のように一緒に回っている時間などなかった。
保護者の中に、見慣れた顔があった。昔は嫌悪を露にしただろう。だけど、それは俺がガキだったからだ。
「――親父。来てたのか」
「……ああ。朋也君か」
親父は一層老け込んでいた。髪は白髪が多くなった。それだけ、苦労したのだろう。俺を育てる為に、何もかもを犠牲にして。その苦労が、親の身になった俺にはわかった。
「杏さんから案内を受け取ってね。せっかくだから来て見ようと」
親父はそう言って、しばし沈黙した。そして、会話を繋げるように、
「……子育ては大変かい？」
「ああ。大変だよ」
正直、あんなに大変なものだとは思っていなかった。夜泣きはする。おむつを換えるのも一苦労。今はその苦労からは開放されたが、それでも、我侭を躾けるのも大変だった。　それに、金がかかる。今より収入を増やす為に、俺は前よりも仕事に没頭しなければならなかった。それでも、家族のために時間を作る苦労は厭わなかったつもりだったが。
「今は親父の苦労がわかる。俺は杏がいるから、こうしていられる。だけど、もし杏がいなかったら、杏を失って、俺一人で育てるなんて事になったら、多分俺はこうしていられない」
そう、俺は恵まれていた。そして、親父は恵まれていなかった。だから、感謝をしなければならなかった。俺は親父から恵んで貰ったんだ。俺は子供過ぎて、幼すぎてそれを気づけないでいた。だけど、今は気づけた。
「親父は、すぐにお袋を失くして、凄く辛かったんだと思う。だけ

ど、親父は残された俺を、ここまで育ててくれた。それは、感謝してもしきれないことだった」
なのに、俺は馬鹿だった。こうまでしてくれた親父を蔑んでいた。
「……朋也君」
「だから、ありがとう親父。今まで、俺を育ててくれて。馬鹿な息子だったけど、今、俺はやっとわかったよ。親父には感謝してもしきれないって」
俺は頭を下げた。
「そんな、お礼を言われる事じゃないよ。僕は親として当然のことをしたまで。それすら、できていたかどうかなんて思えない。駄目な父親だった」
凍りのように凍てついた関係を溶かすまで、多くの時間がかかった。今なら、胸を張って言える。俺と親父は、親子であり、家族なんだと。
「――朋也！」
遠くから声が聞こえてきた。杏の声だ。その横には、子供がいる。俺達の子供だった。慣れない幼稚園の制服を着ているからか、不機嫌そうな顔をしている。
杏は手を振っていた。もう、ちゃんと母親の顔になっている。あいつも、いつまでも昔の杏じゃなかった。
俺は抱き上げた。親父は、笑顔でそれを見守っている。
「――パパ。歌って」
「ああ。あれか」
「朋也、あんたがいつも聞かせてたから、この子あの唄が癖になったみたい」
俺達は唄い始めた。
あの時、女の子が教えてくれた歌。町に幸せを運ぶ歌。
町を家族なんだ。今、それを理解する。俺達は町で育ち、町に育まれる。そして、町を愛する。それは、町が家族だからなんだと思う。
俺達は唄い続ける。いつまでも。家族であり続ける限り。

――こうして、俺達は家族になった。これから、俺達は歩んでいく。
長い、長い人生を。
この町で、俺達、家族と一緒に。

Ｆｉｎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7833m/

杏アフター

2010年10月12日01時13分発行